六尺孤安くにか在る

を渉獵し、事を處して、皆、旨に稱ふ。之に由つて、委するに政事を以てし、權、人主に侔しく、人、之を二聖といふ。高宗の世に在つて、后、自ら子弘を殺し、子賢を廢す。高宗、既に崩じ、子哲位に卽くや、廢して廬陵王となして、子旦を立つ。后、朝に臨んで、制を稱し、武氏の七廟を立つ。

英公李敬業、兵を起して、之を討つ。檄に曰く、一抔の土、未だ乾かず、六尺の孤、安にか在る。又曰く、試に今日の域中を觀よ、竟に是れ誰が家の天下ぞと。太后、將を遣し、擊つて之を殺す。越王貞、又兵を擧げて匡復す、克たずして死す。太后、遂に大に唐の宗室を殺し、自ら曌と名づけ、皇帝と稱し、國を周と號し、旦を以て皇嗣となし、姓を武と改む。時に曌年六十七。初め、僧懷義を寵し、後に張易之、張昌宗を寵し、兄弟中に居て、事を用ゆ。易之は五郎、昌宗は六郎。佞者曰く、人は言ふ、六郎は蓮花に似たり。吾は謂ふ。蓮花は六郎に似たるのみと。曌、人心の服せざるを知り且つ內行正しからず、人の己を議せむことを畏れて、盛に告密の門を開き、酷吏侯思止、索元禮、周興、來俊臣、吉頊等を用ゐて、鍛鍊羅織し、率ね反逆を以て、人を誣ひ、誅殺勝げて紀すべからず。之を用ゐて、天下を拑制す。然れども、權數あつて善く人を用ゐ、賢才も、亦た之が爲に用ゐらるるを樂む。徐有功、仁恕にして、法を執る。曌、每に意を屈して、之に從ふ。將相、多く人を得たり。

魏元忠、婁師德、狄仁傑、姚元崇皆名相。宋璟、亦た朝に顯はる。師德、寛厚清愼、犯せども校せず。弟代州の刺史に除せらる。師德謂ふ。兄弟、榮寵過盛なるは、人の惡む所なり。何を以て、之を免れむ。弟曰く、今より、人、某の面に唾すと雖も、之を拭はむのみ。師德、愀然として曰く、是れ吾が憂たる所以なり。人、汝の面に唾するは、汝を怒らしめむとするなり。然るに之を拭はば、其意に逆つて其怒を重ねむ。唾は拭はざるも、自ら乾く、當に笑つて之を受くべきのみと。師德、毎に仁傑を薦む、然も、仁傑、毎に師德を毀る。曌、仁傑に語つて曰く、朕、卿を用ゐしは、師德の薦むる所なりと。仁傑、退いて歎じて曰く、婁公盛德、我容れらるること久しと。武承嗣、三思、太子たらむを營求す。仁傑、從容として曌に言つて曰く、太宗、櫛風沐雨、親ら鋒鏑を冒し、以て天下を定めて之を子孫に傳へ、太帝二子を以て陛下に托す。今乃ち之を他族に移さむと欲す。乃ち天意に非ざるなきか。姑姪と母子と、孰れか親しき。陛下、子を立つれば、則ち千秋萬歲の後太廟に配食せむ。姪を立つれば、則ち未だ、姪、天子となつて、姑を廟に祔する者を聞かざるなりと。曌、やや悟る。既にして、又力めて勸む。遂に房州より廬陵王を召して、都に還らしめ、立てて皇太子となし、子旦を以て相王となす。仁傑、最も信重せられ、面折廷爭を好む。曌、常に屈從し、稱して、國老となして、名いはず。仁傑、卒す、曌、泣い

て歎ず。元行冲、博學多通なり。仁傑、之を重んず。行冲、規諫多し。曰く、明公の門には、珍味多し、請ふ藥物の末を備へむ。仁傑笑つて曰く、吾が藥籠中の物、何ぞ一日も無かるべけむやと。姚元崇等、數十人、皆仁傑が薦むる所。或は曰く、天下の桃李、悉く公の門に在り。仁傑曰く、賢を薦むるは、國の爲にして、私の爲にするに非ざるなりと。嬰、嘗て仁傑に問ひ、一佳士を得て、之を用ゐむと欲すといふ。仁傑曰く、張柬之といふ者あり、老いたりと雖も宰相の才ありと。後、竟に柬之を用ゐて、相となす。嬰、疾に寢ねて甚し。柬之、崔玄暐、敬暉、桓彥範、袁恕己と共に、羽林將軍李多祚等を率ゐ、兵を擧げて、內亂を討ち、太子を東宮に迎へ、關を

武后殂す（西紀七〇五）

評　武氏の禍を送りて韋氏の禍來る

斬つて入り、易之、昌宗を廡下に斬り、嬰を上陽宮に遷し、尊號を上つて、則天大聖皇帝といふ。この冬、殂す、年八十二。唐を易へて周となすもの、十有六年。改元するもの十、曰く、天授、如意、長壽、延載。曰く萬歲通天。曰く神功、聖曆、久視、大足、長安。

長安の五年、帝、位に復す、唐と號す。帝、卽位二月にして廢せられ、均州に居る者一年、房州に居る者十三年、還つて太子となる者又八年、然る後に、正に反り、韋氏復た皇后となる。上、房陵に在つて、自殺せむと欲する毎に、后毎に之を止む。上、共に私に誓ふ、異時幸に復た天日を見ば、唯だ欲するままにして禁せずと。是に至つて、朝に臨む毎に、后、必ず帷幔を施し、殿上に坐して朝政

を預り聞くこと、武氏の高宗の世に在るが如し。上の女安樂公主、武三思の子に適く。三思、之を以て、宮禁に入るを得て、韋后に通ず。后、三思と雙陸す。而して上、爲に點籌す。上、遂に三思と政事を圖議す。張柬之等、皆、制を受く。五人、皆、王爵を賜うて、政を罷む。既にして、遠く貶して之を殺す。安樂公主等、勢に依つて事を用ゐ、請謁賄を受け、墨敕を降して、官に除し、斜封して中書に付す、時に之を斜封官といふ。凡そ數千人。人、上言するあり、皇后淫亂なりと。上、之を面詰す。其人、抗言して撓まず。中書令宗楚客、制を矯めて之を撲殺す。上の意、怏々たり。后及び其黨、始めて懼る。馬秦客、楊均、皆、后に幸せらる。事の泄れむことを恐れ、安樂公主も、亦た后が朝に臨み、己を以て皇太女となさむを欲し、乃ち相與に餅餤の中に於て、毒を進む。上、位に復して改元するもの二、曰く、神龍、景龍。景龍四年にして、弑に遇ふ。溫王重茂を立て、后、攝政す。相王の子隆基、兵を起して亂を討ち、后及び安樂公主を斬り、其黨を併せて、皆、之を誅し、重茂を廢し、相王を奉じて、之を立つ、之を睿宗皇帝となす。

【睿宗皇帝】名は旦。初め高宗崩じ、中宗廢せらるるや、武氏、旦を立つ。帝たる者七年、然も廢せられて、周の皇嗣となる者九年、相王に改封せらるる者十年。是に至つて、復た帝となる。隆基を立てて太子となす。宋璟、姚元之、政を爲す。二人心を協せて、弊政

八風の舞

を革め、忠良を進め、不肖を退け、賞罰公を盡し、請托行はれず、紀綱修舉す。當時翕然たり。祝欽明等を貶す。欽明、嘗て八風の舞を爲る。人曰ぐ、五經地を掃ふと。

帝の妹太平公主、二張を誅し、韋氏を誅する時に於て、皆、力あり。既に屢ば大功を立て、勢あつて尊重せらる。上、嘗て、與に政を議し、權、人主を傾け、其門、市の如し。太子の英武を憚つて之を易へむと欲す。韋安石、宋璟、張說、姚元之等、上の意を感悟するに賴つて、政事、皆、太子の處分を取る。上、復た帝となつてより、改元するもの二、曰く、景雲、太極。是に至つて三年、自ら太上皇と稱し、位を太子に傳ふ、之を玄宗明皇帝となす。

西紀自七一二至七五六

【玄宗明皇帝】名は隆基。初め、臨淄王となる。韋氏の亂、陰に才勇の士を聚めて、密に匡復を謀る。太宗、初め驍勇を選んで、百騎となし、武后增して千騎となし、左右羽林に隸す。中宗、之を萬騎といひ、使を置いて、之を領せしむ。隆基、皆厚く其豪傑に結び、卒に韋氏を誅し、睿宗を奉ず。封せられて、平王となる。睿宗、將に儲嗣を立てむとす。長子成器、平王の有功なるを以て、力めて之に讓り、遂に太子となり、尋いで、禪を受く。

開元元年、高力士、右監門將軍となり、內侍省事に知たり。初め、太宗、制を定め、內侍省には三品官を置かず、黃衣廩食、門を守り、命を傳ふるのみ。是に至つて、三品將軍に敍する者、漸く多

く、宦官増して三千人に至る。内侍の盛なる、是に始まる。

姚崇、紫微令となる。

二年。太常、俗樂を併典すべからざるを以て、左右教坊を置き、之を皇帝梨園の弟子といふ。

珠玉錦繡を殿前に焚く。

興慶宮を作り、樓を置き、西を花萼相輝といひ、南を勤政務本といひ、宋王成器等の宅、其側を環る。

三年。盧懐慎、黄門監となる。懐慎、清謹儉素、妻子、饑寒を免れず。居る所、風雨を蔽はず。姚崇、嘗て謁告すること十餘日、政事委積す。懐慎、決する能はず。崇、出づ。須臾に裁決し盡す。顧みて、齊澣に謂つて曰く、我、相たる如何。澣曰く、時を救ふの相といふべしと。懐慎、才の及ばざるを知り、事毎に崇を推す。時に之を伴食宰相といふ。

盧懐慎伴食宰相

四年。姚崇、罷む。宋璟、黄門監となる。璟、相となるや、務めて人を擇び、百官、各其職を得たり。好んで、顔を犯して正諫す。上、甚だ之を敬憚す。璟、姚崇と相繼いで政を爲す、崇は善く變に應じ、璟は善く文を守り、志操同じからず、然れども、心を協せて輔佐し、賦役をして寛平ならしめ、刑罰清省、百姓富庶。唐世の賢相、前には房杜を稱し、後には姚宋を稱し、佗は比するを得るなし。二人進見する毎に、上輒ち之が爲に起ち、去れば、軒に臨んで

前には房杜後には姚宋

之を送る。

八年。宋璟、罷む。

九年。宇文融、言ふ、天下の戸口逃移し、巧僞甚だ多し、請ふ、檢括を加へむと。同平章事、源乾曜、之を賛成す。融を以て、勸農使となし、奏して、勸農判官十人を置く。天下を分行して、競うて刻急をなし、州縣風を承けて勞擾し、百姓之に苦む。

評 勸農使誅求の具となる善政酷吏にスポイルせらるゝの好例

同三品張說、建議し、壯士を召募して、旬日、精兵十三萬を得たり。諸衞に分隸し、更番上下す。兵農の分るる、是に始まる。

十三年。長從宿衞を更め命づけて彍騎となす。

二十一年。韓休、同平章事たり。休、人と爲り峭直。上、或は宴遊小過あれば、輒ち左右に謂つて曰く、韓休、知るや否やと。言終つて、諫疏、既に至る。左右曰く、休、相となり、陛下殊に舊より也せたり。上、歎じて曰く、吾は瘠せたりと雖も、天下は肥えむと。休罷む。張九齡、之に繼ぐ。

二十二年。九齡、中書令となり、李林甫、同三品たり。林甫、柔佞にして狡數多く、深く宦官及び妃嬪の家に結び、上の動靜を伺ひ、之を知らざるなし。之に由つて、奏對する毎に常に旨に稱ふ。

評 李林甫柔佞にして狡數多し當世亦其類多し

二十四年、幽州の節度使張守珪、敗軍の將安祿山を執へて、京師に送る。張九齡、批して曰く、守珪の軍令、若し行はるれば、祿山宜しく死を免るべからずと。上、其才勇を惜んで、之を赦す。九

安祿山

史思明

張九齢千秋金鑑録を上る

齢、力争して曰く、祿山、反相あり、誅せざれば、必ず後患をなさむ。上曰く、卿、王夷甫が石勒を識るを以て、枉げて忠良を害する勿れと。竟に誅せず。祿山はもと營州の雜胡なり。初名は阿犖山。母、再び安氏に適く。故に其姓を冒す。部落破散して、逃れ來る。狡黠にして、守珪に愛せらる。又、史窣子といふ者あり、祿山と里閈を同じうし、又驍勇なり。守珪、入つて、事を奏せしむ。上、名を思明と賜ふ。

千秋節に、群臣、皆、寶鏡を獻ず。九齢、前世の興廢を述べて、千秋金鑑録五卷を爲つて、之を上る。

九齢、罷む。李林甫、中書令を兼ぬ。上、在位久しく、漸く奢欲を肆にす。林甫、遂に政を專らにするを得たり。

楊貴妃

二十六年、忠王を立てて太子となす。

二十九年。安祿山を以て營州都督となす。祿山、傾巧にして、善く人に事ふ。上の左右、平盧に至れば皆厚く賄ふ。歸つて、之を譽む。上、益す以て賢となす。

天寶元年。祿山を以て平盧節度使となす。

二年。祿山、入朝す。

三年。年を改めて、載と曰ふ。

祿山を以て、范陽節度使を兼ねしむ。

四載。楊太眞を以て、貴妃となす。故の蜀州司戸玄琰の女なり。

評　玄宗其子の配偶を奪ふを絶すべきなり　人倫の禍凡て閨門に發す鑑みる

上の子壽王の妃たること十年。上、其美を見て、自ら其意を以て乞うて女官たらしめ、且つ壽王の爲に別に娶り、然る後に之を納れ、遂に寵を專らにす。

六載。祿山を以て、御史大夫を兼ねしむ。祿山、請うて、楊貴妃の兒となる。九載。祿山に爵を東平郡王と賜ひ、河北道採訪處置使を兼ねしむ。祿山入朝す。楊釗、兄弟姉妹、皆戲水に往いて之を迎ふ。釗は貴妃の從祖兄なり。禁中に出入するを得たり。之より先、判度支、屢ば帑藏充牣すと奏す。上、群臣を帥ゐて、之を觀る。之に由つて、金帛を視ること糞土の如く、賞賜限なし。釗に名を國忠と賜ふ。

十載。安祿山の爲に第を起し、華麗を窮極す。上、日に諸楊を遣し、之と遊ばしむ。祿山、體肥大。上、嘗て、其腹を指して曰く、此胡の腹中、何の有る所ぞ。對へて曰く、赤心あるのみと。祿山、禁中に入るや、先づ貴妃を拜す。上、其故を問ふ。曰く、胡人、母を先にして父を後にすと。祿山の生日、賜予甚だ厚し。後三日、召し入れ、貴妃、錦繡を以て大襁褓を爲り、宮人をして、綵輿を以て之を舁かしむ。上、聞いて歡笑して、故を問ふ。左右、貴妃、祿兒を洗ふを以て對ふ。上、妃に浴兒の金銀錢を賜ひ、歡を盡して罷む。之より宮掖に出入し、通宵出でず、頗る醜聲あり、外に聞こゆるも、上、亦た疑はず。又、祿山を以て河東節度使を兼ねしむ。李

林甫、祿山と語り、毎に其情を揣り知つて先づ之を言ふ。祿山、驚服し、見る毎に盛冬にも必ず汗す。林甫を謂つて、十郎となす。既に范陽に歸るや、其下、長安より歸れば、必ず問ふ十郎何をか言ひしと。美言を得れば則ち喜ぶ。或は但だ云ふ、安大夫に語れ、須らく好く點檢すべしと。卽ち曰く、噫嘻、我死なむと。

李林甫曰く杖に立つ馬を見ずや

十一載。李林甫、卒す。林甫、上の左右に媚事して、上の意を迎合して以て寵を固うす。言路を杜絶し、聰明を掩蔽す。嘗て、諸御史に語つて曰く、杖に立つの馬を見ずや、一たび鳴けば、輒ち斥け去らると。賢を妬み能を嫉み、己に勝る者を排抑し、性陰險なり。人以て、口に蜜あり腹に劍ありとなす。毎夜、假月堂に獨坐し、深思する所あれば、明日必ず誅殺あり。屢ば大獄を起す。太子より以下、皆、之を畏る。相位に在ること十九年、天下の亂を養成し、然も、上、悟らず。然れども、祿山、林甫の術數を畏る。故に、其世を終るまで、未だ敢て反せず。この歳、國忠、相となる。祿山、必ず反せむといひ、且つ曰く、試に召せ、必ず來らずと。

十三載。祿山、召を聞いて卽ち至る。上、之に由つて、國忠の言を信ぜず。祿山に、左僕射を加へて歸らしむ。

十四載。祿山、蕃將を以て、漢將に代へむと請ふ。上、猶ほ疑はず。表して、馬三千匹を獻じ、毎匹、二人、鞚を執り、二十二の將部をもつて河南に送らんと請ふ。上、始めて、之を疑ひ、使を遣して

安祿山遂に反す

其獻を止む。祿山、床に踞して、拜せずして曰く、馬、獻せざるも亦た可なり、十月當に京師に詣るべしと。使還る。亦た表なし。この冬、祿山、遂に反し、所部の兵及び奚契丹を發し、凡そ十五萬、范陽を發し、引いて南す。步騎精銳、煙塵千里。時に承平久しく、百姓、兵革を識らず、州縣、皆、風を望んで瓦解す。進んで、東京を陷る。

顏眞卿

平原の太守顏眞卿、兵を起して賊を討つ。上、初め、河北、賊に從ふと聞き、歎じて曰く、二十四郡嘗て一人の義士なきかと。眞卿の奏至るに及び、大に喜んで曰く、朕、眞卿何の狀たるを識らず、乃ち能く此の如しと。

評　文天祥の詩に曰ふあり—平原太守顏眞卿、長安天子不知名　斯くの如くして國家れざらんと欲するも得んや

常山の太守顏杲卿、兵を起して賊を討つ。河北諸郡、皆、之に應ず。

十五載。安祿山、僭號して大燕皇帝と稱す。

賊將史思明、常山を陷れ、顏杲卿を執へて、洛陽に送る。祿山、其己に反するを責む。杲卿曰く、我、國の爲に賊を討つ。恨むらくは、汝を斬らず、何ぞ反といふや。臊羯狗、何ぞ速に我を殺さざると。祿山、大に怒り、縛して、之を咼す。死する比まで、罵つて、口を絕たず。

張巡

眞源の令張巡、吏民を帥ゐて、玄元皇帝の廟に哭し、兵を雍丘に起して賊を討つ。

郭子儀、李光弼

朔方節度使郭子儀、河北節度使李光弼、賊將史思明と戰ひ、大に

馬嵬の勅

之を破り、首として、河北の數郡を復す。副元帥哥舒翰、賊と戰つて、大に敗る。麾下、翰を執へて、賊に降る。賊、遂に關に入る。上、出奔して、馬嵬に次す。將士飢疲して、皆、憤怒し、楊國忠等を殺し、及び上に逼つて、貴妃を縊殺し、然る後に發す。父老道を遮つて留まらむことを請ふ。上、太子に命じて、之を慰撫せしむ。父老、太子の馬を擁して、復た行くを得ざらしむ。皇孫儼をして、上に白せしむ。上曰く、天なりと。太子に喩さしめて曰く、汝、之を勉めよ。西北の諸胡、吾、之を撫すること、素より厚し、必ず其力を得むと。且つ、宣旨、位を傳へむと欲す。太子、平涼に至る。朔方の留後杜鴻漸、靈武に迎へ入れ、馬嵬の命に遵はむことを請ふ。牋、五たび上る、乃ち許す。上を尊んで、上皇天帝となす。上在位四十五年、改元するもの三、曰く、先天、開元、天寶。太子立つ、之を肅宗皇帝となす。

西紀自七五六至七六二

【肅宗皇帝】 初名は璵。亨と改名す。忠王として太子となつてより、二十年にして、祿山の亂に遇ひ、是に至つて、位に卽く。京兆の李泌、幼より才敏を以て聞こゆ。上、東宮に在るや、嘗て、泌と布衣の交をなす。使を遣して、之を召し、靈武に謁見し、事、大小となく、之と謀る。上皇、成都に至り、冊寶を遣して、靈武に行かしむ。

使を遣して、兵を回紇に徵す。

唐—玄宗明皇帝—肅宗皇帝—

評　陳濤邪の大敗を詠ず　杜甫官軍戰を冬十日、郡良家子、血作陳陶澤、中水無聲野曠、天清雪洗胡塵黑、四萬義軍同日死、群胡歸來飲箭鏃、仍聞都人市井唱歌聲、回首向北望只啼、日夜官軍至

招討節度使房琯、賊と陳濤邪に戰ふ。琯、車戰を用ゐて、大に敗る。

至德二載。安慶緒、祿山を殺す。祿山、兵を起してより以來、目昏し、是に至つて、復た物を見ず。又疽を病で、躁暴なり。嬖妾の子を以て、慶緒に代へて嗣となさむと欲す。慶緒、人をして、之を弑せしめて自立す。祿山僭號、わづかに一年餘。

上、鳳翔に至る。回紇、子葉護を遣し、精兵四千人に將として至らしむ。天下兵馬都元帥廣平王俶、副元帥郭子儀、朔方等の軍及び回紇、西域の衆を將ゐて、鳳翔を發し、長安に至つて賊を擊つ。賊、大に潰ゆ。大軍、西京に入る。俶、留まつて鎭撫すること三日、軍を引いて、東に出でて、洛陽に至り、回紇と夾擊す。賊、大に敗れ、遂に東京を復す。安慶緒、走つて、鄴を保つ。

安祿山殺さる

賊將尹子奇、睢陽を陷る。張巡、許遠、之に死す。巡、さきに雍丘を守る。軍を寧陵に移し、屢ば賊を破る。既にして睢陽に入り、遠と共に守つて、屢ば賊を却く。食盡く。或は城を棄てむと欲す。巡遠、謀つて曰く、睢陽は、江淮の保障なり。若し之を棄つれば、賊、必ず長驅せむ。是れ江淮なきなり。如かず、堅守して、以て救を待たむにはと。茶紙を食ふ。盡く。遂に馬を食ふ。馬盡く。雀を羅し、鼠を取る。雀鼠、又盡く。巡、愛妾を殺し、以て士に食はしむ。四萬人、わづかに四百を餘すのみ、終に叛く者なし。賊、城に

睢陽城陷り張巡、許遠之に死す

登る。將士、困病して、戰ふ能はず。巡、西向再拜して曰く、臣、力竭く。生きては、既に以て陛下に報ずるなし。死しては、當に厲鬼となつて以て賊を殺すべしと。城、遂に陷る、巡遠、執へらる。南霽雲、雷萬春等、三十六人、皆殺さる。

上皇、蜀郡を發して、西京に還る。

乾元元年。郭子儀等、九節度に命じて、安慶緒を討たしむ。

二年。史思明、兵を引いて慶緒を救ふ。九節度の兵、鄴に潰ゆ。思明、慶緒を殺し、范陽に還つて僭號す。

李光弼、郭子儀に代つて、朔方節度使兵馬元帥となる。光弼、號令嚴整。初め至るや、號令一たび施せば、士卒壁壘、旗幟精明、皆變ず。史思明と戰つて、屢ば之を敗る。

上元元年。太僕卿李輔國、上皇を西内に遷す。上皇、興慶宮を愛し、蜀より歸るや、即ち之に居る。多く樓に御す。父老、過ぐる者、往往瞻拜して萬歲と呼ぶ。上皇、常に樓下に於て、賜ふに酒食を以てす。又、嘗て、將軍郭英乂等を召して、樓に上らしめて、宴を賜ふ。輔國言ふ、上皇、興慶に居り、日に外人と交通し、陳玄禮、高力士、上に不利ならむことを謀ると、數ば上に啓して、之を遷さむとす。許さず。上、不豫、衆を率ゐて劫遷す。上皇、日に以て懌ばず。因つて輩を茹はず、穀を避け、寢く以て疾を成す。

二年。史朝義、史思明を殺す。思明、少子を愛して朝義を惡み、

其敗軍に因つて、之を斬らむと欲す。朝義、人をして、思明を射殺せしめて自立す。

李光弼、大尉となり、八道の行營を統べ、臨淮に鎮す。

寶應元年。郭子儀、諸道節度行營に知とし、興平、定國等の軍の副元帥を兼ね、復た朔方に入る。

上皇、西内に崩ず。位を傳へし後、七年なり。壽七十八。

上、疾に寢す。上皇の登遐を聞いて、轉た劇しく、遂に崩ず。在位七年。改元するもの四、曰く、至德、乾元、上元、寶應。初め、張皇后、李輔國と相表裏し、權を專らにし、事を用ゆ。晩に更に隙あり。上、疾篤し。后、太子を召し、謂つて曰く、輔國、久しく禁兵を典り、陰に亂を作さむことを謀る、誅せざるべからずと。太子、上の體を震驚せむことを恐れて可かず。輔國、其謀を聞く。上、崩ずるや、后を殺して而して後に太子を引いて之を立つ、之を代宗皇帝となす。

【代宗皇帝】 初名は俶。廣平王に封ぜらる。元帥となつて、兩京を定め、楚王に封ぜられ、成王に改められ、既にして太子となり、豫と改名す。是に至つて位に卽き、李輔國を誅す。雍王适を以て、天下兵馬元帥となし、諸將及び回紇の援兵を率ゐて、史朝義を討たしめ、大に之を敗る。賊將李懷仙、朝義を斬つて以て降る。賊將張志忠を以て成德軍を鎭せしめ、姓名を李寶臣と賜ふ。薛嵩、相、衞、邢

洺、貝、磁等の州を鎮し、田承嗣は魏博、德、滄、瀛等の州を鎮し、李懷仙は盧龍を鎮す。朝廷、兵革を厭苦し、無事を苟冀し、因つて、之に授く。諸鎮、自ら黨援をなし、河朔、敢て朝命に抗する、是に始まる。

廣德元年。吐蕃、入寇す。上、陝州に出奔す。吐蕃、長安に入る。關內副元帥郭子儀、之を擊つ。吐蕃、遁れ走る。

二年。宦者程元振を流す。元振、初め、李輔國に附く。輔國、死するや、元振、權を專らにし、自ら恣にすること最も甚しく、諸將の大功ある者を忌んで、皆、之を害せむと欲す。吐蕃、入る。元振、掩蔽して、時を以て奏せず、上の狼狽を致す。中外切齒す。是に至つて、溱州に流さる。

臨淮王李光弼、卒す。上の陝に幸するや、光弼至らず、上、之を撫すること、厚きを加ふ。素より、子儀と名を齊しうす。徐州に在るに及びて、兵を擁して朝せず。麾下の諸大將、復た尊畏せず、光弼、愧恨、疾を成して死す。

永泰元年。平盧の將李懷玉、節度使侯希逸を逐うて、自ら留後に知たり。詔して、因つて之に授け、名を正己と賜ふ。

叛將僕固懷恩、回紇、吐蕃を誘うて入寇す。郭子儀を召して、涇陽に屯せしむ。懷恩、道に死す。二虜、長を爭うて睦しからず。子儀、人をして、回紇に說かしめ、共に吐蕃を擊たむと欲す。之より先、懷恩、回紇を欺いて、子儀既に死せりといふ。使至る。回紇、

信せずして曰く、郭公在らば、見るを得べきかと、使、還り報ず。子儀、數騎と出で、人をして、傳呼せしめて曰く、令公來ると。回紇、大に驚き、藥葛羅、弓矢を執つて陣前に立つ。子儀、冑を免ぎ甲を釋いて進む。諸酋長、相顧みて曰く、是れなりと。皆、馬を下つて羅拜す。子儀、亦た馬を下り、手を執つて之と語り、酒を取つて相與に誓約して還る。吐蕃、之を聞いて、夜、遁る。諸軍、回紇と共に追ひ、大に之を破る、

三年。幽州の將朱希彩、李懷仙を殺す。詔して、因つて、希彩を以て鎮を移さしむ。

大曆五年、宦者魚朝恩を誅す。朝恩、肅宗の時に在つて、觀軍容使となる。軍容の名、是に始まる。九節度相州の敗は、其時なり。廣德の初に至り、天下觀軍容宣慰處置使となり、專ら禁兵を總べ、勢、朝野を傾く。大曆の初、國子監に判たり。座に升り、鼎、餗を覆すを講じ、以て宰相を譏る。王瑨は怒り、元載は怡然たり。朝恩曰く、怒る者は常情、笑ふ者は測るべからざるなりと。朝政、預らざる者あれば、輒ち怒つて曰く、天下の事、我に由らざるものありやと。上、之を聞いて懌ばず。載、閒に乘じて、其專恣不軌を奏す、遂に之を誅す。

七年。盧龍の將、朱希彩を殺して、朱泚を以て鎮を領せしむ。詔して、因つて之を授く。

九年。朱泚、弟滔を以て、鎮を領せしめて入朝す。

十二年。元載、不軌を圖ると告ぐる者あり、案問して死を賜ふ。其家を籍す。胡椒八百斛に至り、他物、是に稱ふ。

楊綰、常衮を以て、同平章事となす。綰、素より清儉。制下るや、郭子儀、方に宴し、坐中の聲樂五分の四を減ず。京兆尹黎幹、騶從甚だ盛なり。卽日、之を省き、止だ十騎を存す。綰、相たること三月にして卒す。上、之を痛悼して曰く、天なるか、朕の太平を致すを欲せず、何ぞ朕が楊綰を奪ふの速なるやと。

十四年。田承嗣、卒す。姪悅、之に代る。

淮西の將李希烈、節度使を逐ふ。詔して、因つて、鎮を以て希烈に授く。

上在位十八年。改元するもの三、曰く廣德、永泰、大曆。崩ず。太子立つ、之を德宗皇帝となす。

【德宗皇帝】名は适、雍王より太子となる。是に至つて卽位す。

常衮、欺罔を以て貶せらる。崔祐甫、同平章事たり。祐甫、時望を收めむと欲す。未だ二百日ならず、官に除する者、八百人。上曰く、人、卿の用ゆる所、多く親故に涉るを謗るは何ぞや。對へて曰く、臣、陛下の爲に人を擇ぶ、敢て愼まずむばあらず、親に非ず、故に非ざれば、何を以てか其才行を諳んじて之を用ゐむと。

淄青の李正己、上の威名を畏れ、表して、錢三十萬緡を獻ず。崔

評　崔祐甫の所言親に非ず、故に非ざれば何を以てか其才行を諳んじて之を用ゐ

祐甫、請うて、使をして淄青の將士を慰勞せしめ、因つて、以て之を賜ふ、正己、慚服す。天下、以爲へらく、太平、庶幾はくは望むべしと。

上、方に精を勵まし、治を求め、不次に人を用ゆ。祐甫、楊炎を薦む、司馬より除せられて、同平章事となる。既にして、祐甫、病んで、事を視ず。

建中元年。始めて、兩稅法を作る。唐初賦歛の法、田あれば租あり、身あれば庸あり、戶あれば調あり。玄宗の末、版籍漸く壞る。至德兵起り、所在の賦歛、迫趣して取辨し、復た常準なし。下戶、困弊に勝へず。率ゐて皆逃れ徙る。是に至つて、楊炎、建議し、先

云々名言といふべし然れども往々にして朋黨比周の弊を免れず

財制稅制を整理す

出を計りて入を制す

ず州縣每歲用ゆる所、及び上供の數を計つて、人に賦し、出を量り、以て入を制す。戶に主客なく、見居を以て簿となし、人は丁中となく、貧富を以て差となし、行商をなす者は在所の州縣三十の一を稅し、居人の稅は、秋夏に之を兩徵し、其租庸調雜徭は、悉く省く。

崔祐甫、卒す。

忠州刺史劉晏を殺す。晏、善く財計を治む。肅宗、代宗より以來戶部度支鑄錢鹽鐵轉運等の事を領し、同平章事を以て、使に充つ。轉運を通じ、鹽利を幹し、百貨の低昂を制し、軍國の用、賴つて以て充足す。然れども、久しく、利權を典り、衆、頗る之を疾む。又、楊炎と相悅ばず、竟に忠州に貶せらる。人、炎の旨を希ひ、晏

の怨望を告ぐ。上、人を遣して之を縊らしむ。

二年。成德の李寶臣卒す。子惟嶽、自ら軍務を領す。後、王武俊、斬つて之に代る。

評　盧杞藍面鬼色奸惡酷薄の相なり

楊炎、盧杞、同平章事たり。炎、未だ幾ならずして罷む。杞、藍面鬼色、口辯あり。上、之を悅ぶ。

評　郭子儀は盛德の長者といふべし

郭子儀卒す

尙父大尉中書令汾陽忠武王郭子儀卒す。子儀、身を以て、天下の安危をなすもの、三十年。功、天下を蓋ふ。然も、主、疑はず。位、人臣を極む、然も、衆、疾まず。嘗て、使をして、魏博に至らしむ。田承嗣、西望して之を拜して曰く、此膝、人に屈せざること久し。今、公の爲に拜すと。中書令を校する、凡そ二十四考、家人三千人、八子六婿皆顯はる。諸孫數十人、安を問ふ毎に、盡く辯ずる能はず、之を額するのみ。年八十三にして終る。

平盧の李正己卒す。子納自ら鎭を領す。朱滔、田悅、王武俊、李納、先後して皆反す。

三年。四人、皆自ら王と稱す。

李希烈、反す。

兩河、兵を用ゆ。府庫支へざること數月。先づ富商の錢を括し、諸道の稅を增し、四年、稅閒架を行ひ、陌錢等の法を除く。

李希烈、襄城に寇す。詔して、涇原等の道の兵を發して、之を救ふ。涇原の節度使姚令言、兵を率ゐて、京師を過ぐ、師を犒ふに、

朱泚

惟だ糲食菜餤のみ。衆、怒つて亂をなして城に入る。上、出奔す。亂兵、太尉朱泚を奉じて、主となす。司農卿段秀實。泚を誅せむことを謀る。克たず。泚、衆を召して帝と稱せむことを議す。秀實、其面に唾し、大に罵り、笏を以て泚の額を擊つ。血、地に濺ぐ、泚、之を殺し、遂に大秦皇帝と僭號す。之より先、術士桑道茂といふ者あり、言ふ、數年の後、宮を離るるの厄あらむ、奉天に天子の氣あり、其城を高大にし、以て非常に備ふべしと、上、之に從ふ。是に至つて遂に奉天に奔る。泚、奉天を犯す。李晟、兵を率ゐて、赴き援く。渾瑊、泚を擊つて之を破る。奉天圍解く、李懷光、難に赴き、亦た泚の兵を破つて、奉天に至る。入つて、盧杞の姦を白せむと欲す。杞、之を隔て、入つて見るを得ずして行く。表を上つて、杞の惡を暴す。衆論、亦た喧騰して、杞を咎む。上、已むを得ずして、之を遠貶す。

興元元年。大赦す。陸贄、上に勸め、己を罪して、以て天下に謝せしむ。奉天より下す所の書詔、驕將悍卒も、之を聞いて、感激して涕を揮はざるなし。王武俊、田悅、李納、表を上つて罪を謝す。李希烈、大楚皇帝と僭號す。瓊林の大盈庫を行宮に置く。陸贄、諫めて、其榜を去らしむ。李懷光、反す。上、梁州に走る。魏博の田緒、田悅を殺し、自ら軍府を領す。

李晟、長安を克服す。朱泚、走る。其將、之を斬つて以て降る。晟、露布し、行在に至つて曰く、臣、既に宮禁を肅清し、寢園に祗謁し、鐘簨移らず、廟貌故の如しと。上、之を覽て、泣いて曰く、天、李晟を生じ以て社稷の爲にす、朕の爲にするに非ざるなりと。

車駕、長安に還る。

顏眞卿殺さる

顏眞卿、李希烈に殺さる。之より先、眞卿、盧杞に陷れられ、使を希烈の所に奉せしむ。人、言ふ、一元老を失ふ。國家の爲に羞づと。賊中に至る。之を留むる、將に二歲ならむとす。屈せず。竟に賊に縊らる。

貞元元年。盧杞、量移せられ、將に再び入らむとして卒す。

幽州の朱滔、卒す。

馬燧及び諸軍、河中を平らぐ。李懷光、縊れて死す。

二年。淮西の將陳仙奇、李希烈を殺して、以て降る。吳少誠、仙奇を殺す。朝廷、因つて、少誠を以て鎭を領せしむ。

三年。張延賞、同平章事たり。之より先、吐蕃の尙結贊、鹽夏州に據る。李晟、嘗て、其一堡を破る。渾瑊、馬燧、各、兵を擧げて、之に臨む。懼れて、和を請ふ。辭を卑くし、禮を厚くして、馬燧に求む。燧、信じて、朝に請ふ。晟曰く、戎狄信なし、之を擊つに如かずと。延賞、晟と隙あり、數ば和を便なりといふ。渾瑊をして、吐蕃と平涼に盟はしむ。吐蕃、盟を劫す。瑊、走り免る。吐

評　李泌の盧杞評姦人を道破し得たりといふべし

蕃、晟、燧、瑊を畏る。曰く、此三人を去れば、唐は圖るべきなりと。是に於て晟を離間し、燧に因つて、以て盟を求め、瑊を執へ、以て燧を賣り、併せて、罪を得せしめ、因つて、兵を縱つて、直に長安を犯さむと欲す。會ま、瑊を失して止む。

李泌、同平章事たり。上、泌と、從容として、卽位以來の宰相を論じ、人、盧杞を姦邪といふも、朕殊に覺らずといふ。泌曰く、是れ乃ち姦邪たる所以なり。若し、之を覺らば、豈に建中の亂あらむやと。泌、謀略あり、然も、好んで神仙を談じて詭誕なり。故に世に輕んぜらる。相たること、未だ三歲ならずして卒す。

八年。陸贄、同平章事たり。

夏縣の陽城

九年。太尉中書令西平忠武王李晟、卒す。

十年。陸贄、罷む。

十一年。贄を忠州別駕に貶す。贄、奉天より以來、力を宣ぶること最も多く、事に隨つて論諫し、百奏を剴切にす。帝、言を盡くせしを追仇す。又譖せらる。故に貶せらる。初め、夏縣の陽城、處士を以て、徵されて諫議太夫となる。皆、風采を想望す。職に在ること七年にして諫めず。韓愈、爭臣論を作つて之を譏る。是に於て、判度支裴延齡、贄を譖す。城、諸諫官を率ゐ、闕を守つて、延齡の姦邪、贄の無罪を論ず。時に朝廷、延齡を相とせむとす。城曰く、若し延齡を以て相となせば、當に白麻を取つて之を壞るべしと。庭

に慟哭す。遂に沮む。城、國子司業に左遷せられ、後、又、道州刺史に貶せらる。民を治むる、家を治むるが如し。自ら其考に書して曰く、撫字心勞し、催科は政拙、考は下の下と。

十四年。淮西の吳少誠、叛す。

二十一年。上崩ず。在位二十七年。改元するもの三、曰く建中、興元、貞元。初め、政清明なる者二歳にして、盧杞用ゐられ、叛亂相繼ぎ、末年は姑息のみ。太子立つ、之を順宗皇帝となす。

【順宗皇帝】名は誦。太子たりし時、書を善くする者王伾、棋を善くする者王叔文あり。共に、出入して娛侍す。因つて言ふ、某は相とすべく、某は將とすべく、幸に異日之を用ゐんと。密に、學士韋執誼及び朝士の有名にして速進を求むる者、陸淳、呂溫、李景儉、韓曄、韓泰、陳諫、柳宗元、劉禹錫等に結び、定めて死友となし、日に輿に游處し、縱跡詭祕、其端倪を知る者あるなし。德宗崩じ、太子位に卽く。之より先、風疾あり、音を失ふこと五閱月。伾、叔文等、事を用ゆ。

陸贄、陽城を追うて、京に赴かしむ。未だ至らずして卒す。

上在位、改元して永貞といふ。僅かに八月、自ら太上皇と稱し、位を太子に傳ふ、之を憲宗章武皇帝となす。

【憲宗皇帝】名は純。年二十八、太子となつて監國たり。尋いで、位に卽き、王伾、王叔文を貶す。伾、病んで死す。其黨、皆遠く貶

せらる、

元和元年。西川の節度使劉闢反す。同平章事杜黄裳、高崇文を薦めて、之を討たしむ。

夏州の留後楊惠琳、朝命を拒む。詔して、之を討つ。兵馬使に斬らる。

高崇文、成都に克ち、劉闢を擒にす。京師に送つて、之を斬る。

二年。鎮海節度使李錡反す。詔して、之を討つ。兵馬使、錡を執へ、京師に送つて之を斬る。

三年。沙陀の朱邪盡忠、其子執宜と來り降る。沙陀、勁勇、諸胡に冠たり。吐蕃、戰ふ毎に、以て前鋒となす。後、其同鶻に貳ある

を疑ひ、之を河外に遷さむと欲す。懼れて、唐に歸す。之を靈州に置く。用ゐて征討するや、皆捷つ。

杜黄裳より以後、相繼いで、相たる者、武元衡、李吉甫、裴垍、李藩、李絳、皆、賢相たり。垍、嘗て、李吉甫の爲に人才を疏する三十餘、數月に用ゐ盡す。翕然として、稱して人を得たりとなす。垍、器局峻整、人人敢て干すに私を以てせず。藩、嘗て、給事中となる、制敕不可なるものあれば、卽ち之を批す。吏、更に素紙を連ねむことを請ふ。藩曰く、かくの如くすれば狀なり、何ぞ批敕と名づけむと、垍、之を薦めて相となす。知つて言はざるなし。絳、鯁直、吉甫は善く逢迎す。絳、與に上の前に爭論する毎に、上多く絳を

直とす。時に、在朝、崔群、白居易等の如き、皆、讜讜として直。元和の世、朝廷清明なること、此を以てなり。

七年。魏博の兵馬使田興、吏を請うて奉貢す、詔して、以て節度使となし、裴度を遣して宣慰し、錢百五十萬緡を賜ひ其軍を犒ふ。六州の百姓。皆、給復すること一年。軍、賜を受けて、歡聲、雷の如し。成德、衮、鄆、諸鎮の使者、之を見て、相顧みて色を失ふ。歎じて曰く、倔强なる者、果して、何の益かあらむと。興に名を弘正と賜ふ。

初め、彰義節度使吳少誠死し、弟少陽、自ら軍府を領す。少陽、陰に亡命を養ふ。少陽、死す。子元濟、自ら軍府を領し、兵を縱つて、侵掠して、東畿に及ぶ。詔して、十六道の兵を發して、之を討つ。平盧節度使李師道、元濟を赦さむことを請ふ。許さず、裴度、淮西の行營を宣慰す。還つて曰ふ、淮西、決して取るべしと。上、悉く兵事を以て、同平章事武元衡に委す。師道、素より、刺客姦人を養ふ。客請ふ、密に往いて元衡を刺さば、他相は必ず爭うて、天子に勸めて、兵を罷めむと。元衡、入朝す。賊、暗に之を射殺し。又、度を擊つて、首を傷つく。上、怒る。賊を討つ、愈よ急なり。度を以て、同平章事とす。上曰く、吾、度一人に倚つて、賊を破るに足れりと。度に命じて、彰義節度使を兼ねしめ、淮西宣慰招討使に充て、諸軍を督して進討す。唐鄧節度使李愬、先づ賊將丁士良、

吳秀琳、李祐を擒にし、釋して、之を用ふ。祐の計を用ゐ、雪夜七十里、兵を引いて蔡州城に入り、鵝鳴池を擊つて、軍聲を混じ、鷄鳴、入つて元濟の外宅に據る。元濟、牙城に登つて拒戰す。既にして、擒に就く、檻して、京師に送つて、之を斬る。叛より誅に及ぶまで、凡そ兵を用ゆること二歲。時に元和十二年なり。淮西、既に平らぐ。上、寖や驕侈なり。之より先二歲、既に、李逢吉を用ゐて、同平章事とし、十三年に至つて、又度支使皇甫鎛を用ゆ。鹽鐵使程异、羨餘を進めて寵あり。並に同平章事たり。朝野駭愕す。元和の政、非なり。

十四年。鳳翔法門寺の塔の佛指骨を迎へて、京師に至らしめ、禁中に留むる三日、諸寺に歷送す。王公士民、瞻奉捨施して、惟だ及ばざるを恐る。侍郎韓愈、上表極諫し、以て之を水火に投ぜむことを乞ふ。上、大に怒り、潮州刺史に貶す。

韓愈佛骨表を奉る

平盧の將、李師道を執へ斬る。裴度、罷む。

十五年。上、暴に崩ず。上、金丹を服して多躁、左右罪を獲て死する者あり。人人、自から危む。宦者陳弘志、弑逆す。其黨、之を諱んで、但だ藥發すといふ。在位十二年。改元するもの一、曰く元和。太子立つ、之を穆宗皇帝となす。

【穆宗皇帝】名は恆。位に卽き、改元して、長慶といふ。四年にし

て崩ず。太子立つ、之を敬宗皇帝といふ。

【敬宗皇帝】名は湛。位に即いて、荒淫なり。嬖倖事を用ゆ。

李德裕丹扆の六箴を獻ず

李德裕、丹扆の六箴を獻ず。一に曰く宵衣、二に曰く正服、三に曰く罷獻、四に曰く納誨、五に曰く辨邪、六に曰く防微と。

上、遊戲度なく、性復た褊急。宦官、動もすれば捶撻に遭ひ、皆怨む。夜、獵して宮に還り、酒酣なる時、宦者劉克明に弑せらる。在位三年。改元するもの一、曰く寶曆。江王立つ。之を文宗皇帝となす。

【文宗皇帝】名は涵、穆宗の子なり。宦者王守澄に立てらる。後、昂と改名す。太和二年、親ら策して、人を制舉す。宦者、益す横、天子を建置する、其掌握に在り、權、人主の右に出づ。人、敢て言ふなし。賢良方正劉蕡、對策して、之を極言す。考官、皆歎服す。然も敢て取らず、第に中る者は、裴休、李郃、杜牧、崔愼由等、二十二人。皆、官に除す。物論囂然として、屈と稱す。郃曰く、劉蕡下第し、我輩登科す。能く顏厚なるなからむやと。上疏して、授くる所の官を蕡に同さむと乞ふ。報ぜず。

太和五年。上、同平章事宋申錫と共に宦官を誅せむことを謀る。克たず。申錫貶死す。

九年。上、李訓、鄭注等と宦官を誅せむことを謀る。克たず。注は、もと宦者王守澄の引く所。訓、本の名は仲言、又注に引かれて守

評　小人功を争ふて功を遂げ得ず古今共例少からず

澄に見るを得たり。守澄、上に薦む。倜儻にして氣を尚び、文辭口辯あり。權數多し。上、之を悅ぶ。訓、注、上の意を揣り知り、數ば微言を以て、上を動かす。上、其大事を謀るべきを意ひ、誠を以て之を告ぐ。訓、注、遂に宦者を誅するを以て、己の任となす。訓、既に注と勢位共に盛なり。頗る注を忌み、託するに中外勢を協すを以てし、注を出して、鳳翔を鎭せしめ、宦者仇士良を進擢し、以て王守澄の權を分つ。訓、同平章事たり。守澄を除かむことを請ひ、中使をして、之を鴆殺せしむ。注、初め、訓と謀つて鎭に至り、壯士數百をして、入つて守澄の葬を護せしめ、仍つて、請うて、內官をして盡く送らしめ、然る後、之を殺さば、遺類なからむといふ。訓、心に以爲へらく、かくの如くすれば、功、專ら注に歸せむと。乃ち先づ發せむことを謀り、人をして、金吾廳事後の石榴に甘露ありと奏せしめ、宰相、百官を帥ゐて拜賀し、後、上に勸めて往いて觀せしむ。上、宰相をして、先づ往いて視せしむ。訓、陽つて言ふ、眞に非ずと。上、仇士良を顧み、諸宦官を帥ゐて、往いて見せしむ。士良等、既に至り、風、幕を吹いて起し、兵を執る者無數なるを見、驚き走つて、變を告ぐ。訓、金吾の衞士等を呼んで、殿に上らしめ、僅かに擊つて、宦者十餘人を死傷し、事の濟らざるを知つて走る。士良等、神策兵に命じて、金吾の吏卒を殺さしめ、宰相王涯、賈餗、舒元輿等を執へて、誣ふるに、謀反を以てして、之を

腰斬す。訓の謀、惟だ元興、之を知るのみ。他相は、實に知らざるなり。之より、天下の事、皆、北司に決し、宰相は、文書を行ふのみ。李訓、人に殺されて、首を傳へ、鄭注も亦た鳳翔監軍の宦者の爲に殺さる。

開成三年、司徒中書令晉公裴度、卒す。度、憲宗の時、相を罷めてより後、世事に意なく、園池を治め、綠野堂、子午橋等、別墅の勝あり、詩人と觴詠して、自ら娛む。穆宗。敬宗の時、皆、嘗て一度、入つて政を輔け、上の世に至つて、亦た嘗て平章軍國重事たり。時と浮沈するのみ。然れども、四朝の將相、威望遠く四夷に達す。四夷、唐使を見れば、輒ち度の安否を問ふ。身を以て國家の輕重に繫ぎ、郭子儀の如き者二十餘年。

五年。上、崩ず。上、卽位の初、精を勵まし、治を求め、奢を去り、儉に從ひ、中外、翕然として、太平冀ふべしといふ。然れども、宦寺に制せられ、竟に爲すある能はず。嘗て、宰相に問ふ。何の時か、太平ならむと。牛僧孺、答ふるに太平象なきを以てす。末年、嘗て近臣に問ふ。朕は周赧、漢獻に如何と。對ふる者、憮然たり。上曰く、赧獻は制を强臣に受く、今、朕は制を家奴に受く。殆んど如かざるなりと。在位十五年。改元するもの二、曰く、太和、開成。弟潁王立つ。之を武宗皇帝となす。

【武宗皇帝】名は瀍、穆宗の子なり。文宗、嘗て敬宗の子成美を立

朋黨の弊

て太子となす。崩ずるに臨み、成美を以て、國を監せしめむと欲す。宦者、以爲へらく、立つこと己に由らずと。之を廢して、澧を立てて太弟となし、遂に成美を殺して位に卽く。後に炎と改名す。

李德裕を以て同平章事とす。德裕、穆宗の初に在つて學士となり、李宗閔といふ者、嘗て制策に對して、其父吉甫を譏切せしを以て、之を恨み、宗閔を構陷す。之より、各、朋黨を分つて更る相排軋する者四十年に垂んとす。文宗の時に在つて、德裕、侍郎たり。裴度、其相となるべきを薦む。宗閔、宦官の助あつて、遂に相たり。德裕の己に逼るを惡んで、之を出し、且つ牛僧孺を引いて並に相とし、相與に德裕の黨を排擯す。尋いで、德裕を以て、西川を鎭せしむ。德裕、籌邊樓を作つて蜀の地形を圖し、南、南詔に入り、西、吐蕃に達す。日に軍旅に老い邊事に習ふ者を召して、訪ふに、險易遠近を以てし、皆、身歷するが如くす。士卒を練り、堡障を葺し、以て邊に備ふ。吐蕃の將悉怛謀、維州を以て來降す。維州は、もと漢地、兵を入るの路、吐蕃之を得、號して無憂城といふ。德裕、極めて此州を得るを以て便となす。牛僧孺、以て納るべからずとなし、城を以て、叛將に併せて歸す。吐蕃、之を境上に誅し、慘酷を極む。牛李の怨、之より愈よ深し。僧孺等、尋いで罷む。德裕、入つて相たり。宗閔、亦た罷む。宗閔、再び相たり。德裕又罷む。二黨互に相擠援す。文宗、每に歎じて曰く、河北の賊を去るは易く、朝廷の

牛李の怨

河北の賊を去るは易く朝廷の朋黨を去るは難し

朋黨を去るは難しと。德裕、しきりに貶黜せらる。上の立つに及びて、德裕を召して之を相とす。德裕、上に言つて曰く、正人は邪人を指して邪人となし、邪人も亦た正人を指して邪となす、人主の之を辨するに在りと。上、嘉納す。德裕、維州の事を追論し、悉怛謀に褒贈を加ふ。

昭義節度使劉從諫、卒す。姪稹、自ら軍府を領す。德裕謂ふ、澤潞の事體、河朔三鎮と同じからず、河朔は亂に習ふこと、既に久しく、累朝之を度外に置く、澤潞は、近く心腹に在り、若し又、因つて之に授くれば、威令復た諸鎮に行はれずと。上、問ふ、何を以て之を制せむ。曰く、稹の恃む所のものは三鎮。惟だ鎮魏之と同せざるを得ば、稹、能く爲すなきなり。重臣を遣し、鎮魏に諭して、之を討たむと。詔して曰く、澤潞の一鎮、卿が事體と同じからず。子孫の謀をなして輔車の勢を存せしむる勿れと。鎮魏、悚息して、命を聽く。二鎮の兵、朝廷遣す所の行營の將王宰、石雄と各進討す。

河東の都將楊弁、亂を作し、節度使を逐ふ。中使馬元實をして曉諭し、且つ之を覘はしむ。元實、賂を受けて還り、衆中に大言す、相公須らく早く之に節を與ふべし、牙門より柳子に至るまで、十五里に列し、地に光明甲を曳く、之を如何にして、之を取らむと。德裕、之を詰る。辭屈す。奏す、微賊決して恕すべからず、若し國力支へざれば、寧ろ、劉稹を捨てむと。河東の兵出でて戍る者、朝

評　仇士良の一語蓋し内官が君主を壟斷する秘訣

廷、客軍をして、太原を取らしむるを聞き、妻孥の屠られむことを恐れ、乃ち歸つて、弁を擒にして、京師に送り、之を斬る。未だ幾ならずして、劉稹、勢窮蹙す。潞人、稹を殺して以て降り、澤潞平らぐ。德裕に、太尉衞國公を加へ、牛僧孺を貶して循州長史となし、李宗閔を封州に流す。

宦者仇士良の官爵を削り、其家を籍沒す。之より先、士良致仕し、其黨、歸るを送る、士良之に敎へて曰く、天子は、閒ならしむべからず、常に宜しく、奢靡を以て、之を娛ますべく、他事に及ぶに暇なからしめよ。愼んで、之をして、書を讀み、儒生を親近せしむる勿れ。前代の興亡を見て、心に憂懼を知らば、吾輩、疏斥せられむと。

天下の佛寺を毀ち、僧尼は勒して歸俗せしむ。

會昌六年、上、崩ず。在位七年。改元するもの一、曰く會昌。光王立つ、之を宣宗皇帝となす。

【宣宗皇帝】名は怡、憲宗の子なり。幼にして不慧と號し、太和の後、益す自ら韜匿す。文宗、好んで其言を誘うて、以て笑となす。武宗豪邁、尤も之を禮せず、名づけて光叔となす。武宗、疾篤し、子幼なり。宦官、策を禁中に定め、決して、怡を立てて皇太叔となし、更めて忱と名づけ、權に軍國の事を勾當せしむ、裁決、咸な理に當る。人、始めて、其隱德を知る。尋いで卽位す。

李德裕、罷む。僧孺、宗閔等、北遷す。德裕、三たび貶せられ、崖州司戸に至つて死す。

令狐綯、同平章事たり。之より先、綯、學士たり。上、嘗て、太宗撰する所の金鏡錄を以て、綯に授けて之を讀ましめ、又、貞觀政要を屏風に書するや、毎に色を正しうし、拱手して讀む。嘗て、學士畢諴と邊事を論ずるや、諴、具に方略を陳ぶ。上曰く、意はざりき、頗牧、吾が禁中に在らむとはと。卽ち用ゐて邊帥となす。果して、其任に稱ふ。上、聰察强記なり。嘗て、密に學士韋澳をして州縣の境土風物及び諸利害を纂次せしめ、號して、處分語といふ。刺史、入つて謝して出づる者あれば、曰く、上、本州の事を處分し

處分語

此階前は萬里なり

て、人を驚かすと、建州の刺史、入つて辭す。上、問ふ、建州、京師を去ること幾何ぞ。曰く、八千里。上曰く、卿、彼に到つて、政をなす。朕、皆之を知れり。遠しといふ勿れ。此階前は、萬里なりと。令狐綯、奏して、李遠を杭州の刺史に擬す。上曰く、吾聞く、遠の詩に云ふ、長日惟だ消す一局の碁と、安んぞ能く人を理めむ。綯曰く、詩人、この高興に托す、未だ必ずしも實に然らずと。嘗て詔す、刺史、外より徙るを得るなく、必ず京に至つて面察せしめよと。綯、嘗て、故人を徙して鄰州となし、便道より官に之かしむ。上、之に問うて曰く、詔命、既に行はる。直に廢格して用ゐず、宰相は權ありといふべしと。時方に寒、綯、汗、重裘に透る。上、朝

に臨んで、群臣に對するに、未だ嘗て惰容あらず。宰相、事を奏する毎に、旁に一人なく、威嚴、仰視すべからず。事を奏して畢れば、忽ち怡然として閒語すること、一刻ばかり、徐に復た容を整へて曰く、卿輩、善く之を爲せ。常に恐らくは、卿輩、朕に背いて、再び相見るを得ざるをと。綯、嘗て、人に謂つて曰く、吾、十年政を秉り、最も恩遇を承く。延英に事を奏する毎に、未だ嘗て、汗、衣を沾さずむばあらざるなりと。嘗て、學士韋澳を召し、左右を屏けて、之に問うて曰く、近日內侍の權勢如何。對へて曰く、陛下の威斷、前朝の比に非ず。上、目を閉ぢ、首を搖かして曰く、全くは未だし、全くは未だし、尙ほ之を畏るること在りと。又、嘗て、綯と謀つて、盡く宦官を誅せむとし、濫して無辜に及ぶを恐る。綯、密に奏して曰く、但だ罪あらば捨るす勿れ、缺あるも補ふ勿れ。自然消耗して、盡くるに至らむと。宦臣、ひそかに其奏を見る。之に由つて、益す朝士と相惡み、南北司、水火の如し。

大中十三年、上、崩ず。在位十四年。改元するもの一。長子立つ、之を懿宗皇帝となす。

評　令狐綯の罪所謂但だ罪あれば捨るす勿れ、缺あるも補ふ勿れ自然消耗して盡くるに至らんと云々は豈にん宦官の妙法に止まらんや

【懿宗皇帝】初名は溫、鄆王に封ぜらる。寵なきを以て、太子たるを得ず。宣宗崩ず、宦者之を立つ、更めて灌と名づく。浙東の賊裘甫起る。聲、中原に振ふ。觀察使王式、討つて、之を斬る。

九年。徐州の賊龐勛起る。之より先、南詔、大理皇帝と稱し、兵を擧げて入寇し、播邕交趾を陷る。徐泗の兵に敕して、桂州に戍せしむ。期を過ぎて代らず。遂に亂を作す。勛、糧料判官となる。戍卒、推して、以て主となし、兵を擁して、北に還り、過ぐる所、剽掠す。徐州に至り、因つて節度使を殺し、諸郡を陷る。招討使康承訓、之を擊ち、沙陀の朱邪赤心を以て前鋒となす。訓、敗死す。赤心に、姓名を李國昌と賜ひ、大同軍節度使となし、又、振武節度使となす。

咸通十四年、上、崩ず。在位十五年。改元するもの一。子晉王立つ、之を僖宗皇帝となす。

李國昌

黄巢

【僖宗皇帝】名は儼。懿宗の少子なり。年十三、宦官に立てらる。懿宗より以來、奢侈日に甚しく、兵を用ゐて息まず。歛賦愈よ急。水旱實を以て聞せず。百姓流殍、控訴する所なく、所在相聚まつて盜をなす。濮州の人王仙芝、起る。曹州冤句の人黄巢、之に應ず。巢、騎射を善くし、任俠を喜ぶ。嘗て、進士に擧げられて第せず。仙芝と共に私鹽を販る。是に至つて、衆を聚めて、州縣を攻剽す。窮民、之に歸する、數月に數萬。仙芝、汝鄭唐鄧を攻陷し、鄂州に寇し、安州を陷れ、荆南に寇す。招討曹元裕と申州に戰つて大敗す。又黄梅に大敗す。之を斬る。黄巢、鄆沂濮を陷れ、宋汴を掠む。南に渡つて、洪虔吉饒信を陷る。宣州に寇し、浙東に入る。鎮海節

度使高駢に破らる。遂に廣南に趨り、廣州を陷る。潭州に出で、北に渡つて襄陽に向ふ。荆門に敗れ、復た引いて南し、宣州を陷る。采石より江を渡る。既にして、淮を渡り、申州を陷れ、潁宋徐袞の境に入る。東都を陷れ、引いて西し、潼關に入り長安に入る。上、蜀に出奔す。巢、大齊皇帝と僭號す。諸道、兵を發して赴き援く。之より先、沙陀李國昌の子克用、兵馬使となり、蔚州大同の軍を戍る、諸將、謀つて曰く、今、天下大に亂れ、朝廷の號令、復た四方に行はれず。是れ乃ち英雄功名富貴の秋なり。李振武、名、天下に聞こえ、其子、勇、諸軍に冠たり。若し輔けて以て事を擧ぐれば、代北は平らぐるに足らざるなりと。人をして、潛に蔚州に詣つて、

國昌の子李克用

鴉軍

朱全忠

克用に說かしむ。克用、雲州に趨いて、之を取る。河東の招義、之を討つて大敗す。克用、忻代に寇し、晉陽に逼る。既にして、大に盧龍の兵の爲に敗らる。蔚朔の兵も亦た討つて其父國昌を敗る。父子、亡げて達旦に走る。朝廷、其罪を赦し、其兵を召して、賊を討たしむ。克用、沙陀を將ゐて來る。賊、之を憚つて曰く、鴉軍至ると。しきりに、賊を破つて、長安を復す。巢、宮室を焚いて遁れ、蔡州に至る。節度秦宗權、之に降る。巢、汴州に趨く。克用等、追擊して、大に之を破る。未だ幾ならずして、賊黨、巢を斬つて、以て降る。

克用の汴州に至るや、朱全忠之を襲ふ。全忠は巢の將朱溫なり。

先に巢に遣されて、同華を攻陷し、尋いで、華州を以て降り、名を全忠と賜ひ、宣武節度使となる。克用を館して、甚だ恭し。克用、酒に乘じて、頗る之を侵す。全忠、不平なり。兵を發して、驛を圍んで之を攻む。克用醉ふ。左右、水を以て、其面に沃いで之に告ぐ。克用、乃ち目を張り、弓を援つて、起つて走る。大雷雨晦冥なるに會し、醉を扶け、電光に乘じ、城に縋して出づ。汴人、橋を扼す。從者力戰して度るを得て免る。克用、晉陽に還り、甲兵を治め、表して全忠を討たむことを乞ふ。詔して之を和解す。聽かず。

上、成都を發して、長安に還る。

秦宗權、僭號す。

上の蜀に奔るや、宦者田令孜、實に之を挾む、自ら以て功となし、權、己より出づ。河中の王重榮、前に亂を作して自立す。令孜、朱玫等を遣して、之を攻む。重榮、救を克用に求む。克用、方に朝廷の全忠を罪せざるを怨む。上言す。玫等、全忠と相表裏して、共に臣を滅せむと欲すと。兵を引いて、河中に赴く。京師震恐す。令孜、上を劫して、鳳翔に奔る。朱玫、追ひ逼れども及ばず。肅宗の玄孫襄王熅を立てて帝となす。玫の將王行瑜、玫を斬る。熅、河中に奔る。王重榮、首を斬つて、行在に送る。上、長安に還る。

上在位十五年。改元するもの五、曰く乾符、廣明、中和、光啓、文德。日に宦官と相處るのみ。天下大亂、盜賊蜂起、豪傑因つて其

閒に起り、互に相呑噬す。朝廷制する能はず。上崩ず、壽王立つ、之を昭宗皇帝となす。

【昭宗皇帝】名は傑、僖宗の弟なり。僖宗大漸、宦者之を立てて太弟となし、遂に位に卽く。後、名を曄と更む。帝、明粹にして英氣あり。文學を喜ぶ。僖宗の威令振はず、朝廷日に卑きを以て、前烈を恢復するの志あり。踐祚の初、中外忻忻たり。然れども、內、宦寺に制せられ、外に强鎭あり、初志竟に遂げず。

越州の董昌、僭號す。昌、さきに、杭州に據る。錢鏐、兵馬使たり。朝廷、昌に命じて、浙東に帥たらしむ。鏐、杭州を領す。是に至つて、昌、帝を越に稱するや、鏐に詔して之を討つ。

三鎭闕を犯す

鳳翔の李茂貞、華州の韓建、邠州の王行瑜、三鎭、兵を擧げて闕を犯し、宰相を殺し廢立を謀る。李克用、來り討つと聞き、乃ち去る。克用、邠州を攻めて行瑜を斬り、將に兵を岐華に移さむとす。貴近、沙陀の甚だ盛なるを恐れて、之を止む。克用、隴西郡王より爵を晉王に進む。兵を引いて晉陽に還る。

錢鏐、越州に克つ。董昌、誅に伏す。

初め、李克用、渭北に屯す。李茂貞、韓建、之を憚り、朝廷に事ふること、甚だ恭し。克用去る。二鎭、復た驕慢なり。茂貞、兵を擧げて闕を犯す。上、華州に出奔す。克用、援を遣す。又、朱全忠が洛陽に營して駕を迎へむとするを聞き、茂貞、建と皆懼れ、上を

奉じて、長安に還る。之より先、嘗て、諸王をして、兵に將として巡警せしめ、又四方に出して、藩鎮を撫慰せしめむと欲す。南北司、事を用ゆる者、其己に利あらざるを恐れ、交も諫めて以て不可となす。上、已むを得ずして、之を罷む。上、華に在りし時、宦官劉季述、諸王十一人を圍殺す。是に至つて、季述、上を少陽院に幽して、太子裕を立つ。同平章事崔胤、神策の將に說いて、季述を討誅し、上、位に復す。宦官、胤を去らむことを謀る。時に朱全忠、天子を挾んで諸侯に命ずるの意あり。胤、書を以て、之を召す。全忠、兵を擧げて來る。宦官韓全誨等、上を劫して、鳳翔に如かしむ。全忠、之を圍む。李茂貞、遂に全誨等を殺し、上を奉じて、長安に還らしむ。全忠、兵を以て、宦官を驅つて、盡く之を殺す。其出でて諸方に使する者は、所在に詔して、之を誅せしめ、黃衣幼弱三十人を存して、洒掃に備ふ。宦官は、文宗より已後、廢置、其掌握に在り、定策國老、門生天子の號あるに至る。是に至つて、大に誅殺せらる。全忠、東平王より爵を梁王に進められ、汴に還る。

全忠、威、天下に震ひ、簒奪の志あり。胤、懼れて、之が爲に備ふ。全忠、表して、胤を除かむことを請ひ、密に其黨をして之を殺さしめ、遂に上に請うて東京に遷都せしめ、百官を促して東行し、士民を驅り徙す。上、侍臣に謂つて曰く、鄙語に云ふ、紇干山頭、雀を凍殺す。何ぞ飛び去つて生處に樂まざると。朕、今、漂泊して、

評　唐代三百年而して天武氏以降則ち女禍相次で到り、遂に宦官漸く事を用ゆるを致し、外加ふる強横に制し難き に至れり

評　歇後鄭五作宰相時事、可知云々、鄭綮の一語頂皮肉の絶頂亡國の頽勢眼前に見るが如し。

竟に何の所に落つるを知らずと。泣下つて、巾を沾す。上、洛陽に至る。李茂貞等、檄を移し、興復を以て辭となす。全忠、將に西討せむとし、上の英氣あるを以て變を生ぜむことを恐れ、人を遣し、洛に入つて、之を弑せしむ。

上、位に卽いてより、賢豪を夢想せざるに非ざるも、卒に之を用ゐず。嘗て、朝士鄭綮といふ者あり、詼諧を好み、歇後の詩を爲つて、時事を嘲る。上、其所蘊あるを意ひ、手づから班簿に注して以て相となす。堂吏、走つて告ぐれども信ぜず。既にして賀客至る。綮、首を搔いて曰く。歇後の鄭五宰相となる。時事知るべしと。

上、在位十七年。改元するもの七、曰く、龍紀、大順、景福、乾寧、光化、天復、天祐。子立つ、之を哀皇帝となす。

【哀皇帝】初名は祚。昭宗、廢太子裕あり、既に壯。全忠、之を惡む。祚、幼を以て立つを得たり。名を祝と更む。全忠、裕等九人を殺す、皆、昭宗の子なり。全忠、相國となり、九錫を加ふ。帝、在位、仍ほ天祐と稱す。四年ならずして梁に禪り、尋いで弑せらる。唐は高祖より、是に至るまで、二十世、凡そ二百九十年。

西紀自九〇七至九二三

譯評 十八史略 卷之六

五代

梁

【梁太祖皇帝】初名は溫、姓は朱氏、碭山の人、朱五經の子なり。少にして無賴、黃巢に從つて、盜をなし、唐に降つて、名を全忠と賜ふ。初め、汴に鎭し、徐州、兗州、鄆州を攻併し、河北、河東の諸郡を攻め、屢ば李克用と兵を交へ、尋いで河中、晉、絳を取り、兵を華岐に用ゐ、東、青州を降し、南、荆襄を取り、諸鎭の間を橫

評　朱三、汝、天子となるか云々全昱の毒舌朱温を評して遺憾なし

行し、唐都を洛に劫遷し、遂に唐を簒し、名を晃と更む。其兄全昱を封じて、王となす。嘗て、之を罵つて曰く、朱三、汝、天子となるか。汝、黄巣に従つて、賊を作す。天子、汝を用ゐて、四鎮節度使となす、何をか汝に負く。奈何ぞ、唐家三百年の社稷を滅して、自ら帝王となるや、行く當に族滅すべしと。此時、李克用、晉に王たり。李茂貞、岐に王たり。楊行密、吳王となつて、淮南に王たり。行密、既に卒す。子渥、之に代る。王健、蜀に王たり。錢鏐、兩浙に王たり。王潮、閩に據る。既に卒す。弟審知、之に代る。馬殷、湖南に據る。劉隱、廣に據る。皆、唐末より以來、諸州に割據す。梁主、馬殷を以て楚王となす。

蜀主王健、帝と稱す。

晉王李克用、卒す。初め、克用、養子あり、存孝といふ。最も驍勇にして功あり。養子存信、疾んで、之を譖す。存孝、禍を懼れて叛す。克用、討つて獲て、囚へ歸り、其才を惜み、意に刑に臨み、必ず之が爲に請ふ者あらむを意ふ、諸將、其能を疾み、竟に一人の言ふなく、遂に死す。又、薛阿檀といふ者あり、亦た勇、密に存孝と通じ、事の泄るるを恐れて自殺す。之より、克用の兵勢、寖く弱し。唐末、數ば汴人に攻められて、數州を失ふ。汴兵、直に晉陽城下に抵る。克用、城に登つて備禦し、寢食に遑あらず。後に、汴兵、再び晉陽を圍み、疫を以て還る。克用、幾んど走らむと欲す。

存勗

汴兵の去るに會して止む。克用、汴人と爭ふ能はざるもの累年、悒悒、以て卒するに至る。子存勗立つ。時に、梁兵、晉を侵して、潞州を圍む。晉の李嗣昭、城を閉ぢ、固守して年を踰ゆ。梁、夾寨を築いて、之を守る。存勗、諸將と謀つて曰く、朱溫の憚る所のものは先王のみ。吾が新に立つを聞かば、以て童子となして、必ず驕怠の心あらむ。もし精兵を簡び、道を倍して、之に趨き、其不意に出づれば、威を取り、霸を定むる、この一擧に在り、失ふべからざるなりと。兵を帥ゐて晉陽を發し、三垂岡下に伏し、旦に大霧に乘じて、直に夾寨に抵り、塹を塡め、鼓譟して入る。梁兵、大に潰ゆ。遂に潞の圍を解く。

淮南の將張顥、徐溫、楊渥を弑す。溫、復た顥を殺す。將吏、楊隆演を推立す。徐溫、自ら昇州を領し、養子徐知誥を以て、往いて之を治めしむ。

梁、王審知を以て閩王となす。

梁、劉守光を以て燕王となす。守光は、盧龍節度使仁恭の子なり。之より先、其父を囚へて、自ら軍府を領す。

梁の夏州亂る。節度李彝昌を殺し、其族父仁福を以て、之に代らしむ。夏州の李氏、本姓は拓跋、上世、唐より姓を賜ひ、鎭を領すること久し。

廣州の劉隱、卒す。弟巖、之に代る。

太原の遺孽

劉守光、燕帝と稱す。

鎮州の王鎔、定州の王處直、晉王を推して、盟主となす。梁、鎮州を攻め、諸郡を襲ひ取る。晉王、其兵を柏鄉に伐つて、大に之を破る。晉、二鎮を帥ゐて燕を伐つ。梁主、之を救ひ、大に敗れて、走り歸る。之より先、梁主、既に疾あり。是に至つて、慙憤して曰く、我、天下を經營すること三十年、意はざりき、太原の遺孽更に昌熾、かくの如くならむとは。吾、其志を觀るに、小ならず。我死せば、諸兒、彼の敵に非ざるなり。吾、葬地なからむと。疾愈よ劇、且つ譟怒を加ふ。假子、友文の妻を愛し、將に友文を立てて嗣となさむとす。遂に其子友珪に弑せらる。在位六年。改元するもの二、曰く、開平、乾化。初め、汴州を以て東都開封府となし、洛陽を西都となし、遷つて洛陽に都するもの凡そ四年。友珪、自立す。尋いで、誅に伏す。均王立つ。

契丹の阿保機は卽ち遼の大祖なり

【均王】名は友貞、初め東都指揮使たり。友珪の簒弑するや、兵を起して、之を誅して、汴に卽位し、名を瑱と更む。

晉王、幽州に入り、燕の劉仁恭及び守光を執へ、歸つて之を斬る。

梁、荆南節度使高季昌に爵を賜うて王となす。

契丹の阿保機は、古しへの東胡の種なり。其國、さきに橫山の南に在り、もと鮮卑の舊地、元魏の時、自ら契丹と號す、初め、太賀

阿保機は西紀九一六至九二六

氏、八子あり、八部太人と號す。一人を推して主となし、三歳一たび代る。唐の開元中、邵固といふ者あり、衆を統ぶ。詔して、襲いで王たるを許す。是に至つて、諸部、耶律斡里の少子阿保機を以て主となす。奚、渤海を並せ、始めて、元を建て、復た代を受けず。國人、之を天皇王といふ。

廣州の劉巖、越王と稱す。既にして、帝と稱し、國號を改めて、漢といふ。後、また、名を龔と更む。

吳の徐溫、徙つて昇州に治し、徐知誥を以て入つて吳政を輔けしむ。

蜀主王建、殂す。子宗衍、立つ。

吳主楊隆演、卒す。弟博普、立つ。

梁、錢鏐を以て吳越國王となす。

晉、梁と連歳兵を交ふ。梁の魏州、晉に降る。晉王、魏に入つて德州、澶州を拔く。梁の劉鄩、晉陽を襲ひ、克たずして還る。鎮定の營を攻むるや、晉師、之を敗る。鄩、魏州を攻む。晉王、又之を敗る。梁、又兵を遣して晉陽を襲ふ。晉人、擊つて之を卻く。晉、衞、磁、洛、相、邢、滄、貝の州に克ち。濮、鄆を掠む。梁人、河を決して、以て晉を限る。晉王、攻めて其四寨を拔く。既にして、大舉して、梁を伐ち、胡柳に戰ふ。晉の周德威、敗死す。晉王、兵を收めて、復た戰ひ、大に梁軍を敗る。晉、德勝南北の兩城を築

く。梁、之を攻む、克たず。梁の招討王瓚、晉の爲に敗られ、梁の河中晉に降る。鎮州の將、趙王王鎔を弑す。晉王、討つて之を平らぐ。之より先、吳蜀、數ば書を以て、晉王に勸めて、帝と稱せしむ。晉王、自ら謂ふ、先王遺言あり。當に務めて唐の社稷を復すべしと。既にして、傳國の寶を魏州に得、將士皆賀し、勸進して已まず、遂に帝位に魏に卽いて、國を唐と號し、李嗣源を遣して、梁の鄆州を襲ひ取らしむ。梁、王彥章を以て招討となす。唐主、德勝の守者を戒めて曰く、王鐵槍は勇決なり、之を謹めと。彥章果して、南城を拔き、進んで諸寨を拔き、楊劉に至つて力攻す。克たずして退く。梁、彥章をして鄆を攻めしむ。唐主、之を救ふ。梁、敗れ、彥章死す。唐、嗣源を以て、前鋒となし、五日、大梁に入る。梁主、猶ほ諸兄弟危きに乘じて亂を謀らむを慮つて、盡く之を殺し、尋いで、其下に命じて、己を殺さしむ。在位十一年。改元するもの二、曰く、貞明、龍德。梁は、太祖帝と稱せしより、是に至るまで、二世一十七年にして亡ぶ。

王鐵槍は勇決なり

評　梁主亡滅に臨みて尙諸兄弟を殺す所、亂世亂倫の眞情を暴露するものといふべし

唐

【唐莊宗皇帝】名は存勗、沙陀の人なり。本姓は朱邪、先世、功を立てて姓李を賜ふ。父克用、勇略あり、一目微眇、獨眼龍と號す。唐の爲に、黃巢を平らげ、大功を立て、晉に王たり。朱氏と仇とな

子を生まば當に李亞子の如くなるべし、吾が兒は豚犬のみ

る。暮年頗る爲に蹙められ、憂、色に形はる。存勗、幼にして進言して曰く、朱氏、凶を窮め、暴を極む。人怨み、神怒る。極めて將に斃れむとす。吾が家、世、忠貞を襲ぬ。大人、當に遵養時晦、以て其衰を待つべし。奈何ぞ、輕しく、沮喪を爲し、群下をして望を失はしめむやと。克用說ぶ。終に臨んで、立てて嗣となし、其下に謂つて曰く、この子、志氣遠大、必ず能く吾が事を爲さむと。年十七、晉王の位を嗣ぎ、卽ち兵を擧げて、梁を破り、潞の圍を解き、之より、連りに勝つ。梁祖、歎じて曰く、子を生まば、當に李亞子の如くなるべし。吾が兒は、豚犬のみと。存勗、東、幽州を併せ、北、契丹を卻け、南、梁と河を夾んで百戰す。之より先、晉陽の監軍張承業、晉王の爲に財賦を捃拾し、兵馬を召補す。攻戰連年、接應乏しからざるは、皆承業の力なり。承業の意は、唐の宗社を復するに在り。王の將に帝と稱せむとするを聞き、力諫す。止むべからざるを知るや、慟哭して曰く、諸侯血戰、もと唐家の爲にす。今、王、自ら之を取り、老奴を誤ると。悒悒、疾を成して卒す。王、位に卽き、晉を改めて唐となし、唐の祀を奉ず。汴に入り、梁を滅し、大梁に都し、既にして、洛陽に遷る。侍中郭崇韜、謀略あり、是に至つて、權、內外を兼ね、謀猷規益、忠を竭して隱すなく、人物を薦引す。他相は成を受くるのみ。

荊南の高季興、入朝す。季興は、季昌の改名なり。唐、以て南平

王となす。

蜀主王衍、盤遊淫湎、國亂れ、盜起る。唐、皇子繼岌と郭崇韜とを遣し、之を伐つて遂に蜀を滅す、衍、降る。其族を赤す、繼岌、讒を信じ、崇韜を殺して還る。

唐、孟知祥を以て西川節度使となす。

唐帝、梁に克つてより後、漸く驕り、首に伶人を以て、刺史となす。帝、幼より、音律を習ひ、或は時に粉墨を傅けて、優人と共に戲る。優名を李天下といふ。嘗て、自ら呼んで、李天下、李天下と、いふ。優人敬新磨、遽に前んで其頰を批つ。帝、色を失ふ。新磨、徐に曰く、天下を理むるは、只だ一人なり。尙ほ誰をか呼ぶやと。

帝、悅ぶ。諸伶、宮掖に出入し、搢紳を侮弄す。群臣、憤疾するも敢て氣を出す者なく、亦た反つて相附託し、貨を納れ、展轉して、以て恩澤を干むる者あり、政を蠹し、人を害し、恣に讒慝をなす。帝、宿將を疎忌し、軍士を恤まず、數ば出でて遊獵し、民田を蹂踐し、上下咨怨す。魏博の將、瓦橋を戍る。代つて歸るや、復た留まつて貝州に屯せしむ。遂に亂をなし、趙在禮を奉じ、入つて、鄴都に據る。唐、將李嗣源をして之を討たしむ。城下に至る。軍士、大に譟いで曰く、將士、主上に從ひ、十年百戰、以て天下を得たり。今、貝州の戍卒、歸るを思ふ、主上赦さず、從馬直の數卒、喧競するも、遽に其族を誅せむと欲す。我輩、初めより、叛心なし、惟だ

死を畏るるのみ。今、城中と勢を合せむと欲すと。白刃を拔き、嗣源を擁して城中に入る。城中、外兵を受けず、之を逆へ擊つ。皆、潰ゆ。嗣源、詭辭して、出づるを得たり。將に兵を召して亂者を攻めむとす。安重誨曰く、公、元帥たり。不幸にして、凶人に劫かさる。若かず、星行して、闕に詣つて、天子に見えむには。庶はくは、自ら明かにすべしと。嗣源、乃ち、南、相州に趨る。譖者奏す、嗣源、既に叛すと。嗣源、上章して、自ら理す。過めて、通ずるを得ず。始めて、疑懼す。石敬塘曰く、安んぞ、上將、叛卒と共に城に入つて、佗日恙なきを保するを得る者あらむや。大梁は、天下の都會。願はくは、先づ往いて、之を取れ。始めて、自ら全うすべし。康義誠曰く、主上無道、軍民怨望す。公、衆に從へば生きむ、節を守れば必ず死せむと。嗣源、乃ち敬塘を以て先鋒となし、李從珂を殿となし、兵を引いて、大梁に入る。唐主、關東に如き、嗣源、既に大梁に據つて諸軍離叛すと聞き、神色沮喪、歎じて曰く、吾、濟らずと。卽ち命じて師を旋す。從馬直郭從謙、兵を帥ゐて帝を汜水に攻む。唐主、流矢に中つて殂す。帝と稱する、わづかに三歲にして弑に遇ふ。改元するもの一、曰く同光。伶人、樂器を斂め、屍を覆うて、之を焚く。嗣源、之を聞いて痛哭す。乃ち、洛陽に入る。百官、牋を上つて、勸進すれども許さず。又三たび、嗣源に請うて國を監せしむ。乃ち之を許す。繼岌、蜀より歸り、途に內

難を聞き、長安に至つて自殺す。監國立つ、之を明宗皇帝となす。

【明宗皇帝】もと胡人邈佶烈なり。晉主克用の養子となり、嗣源と名づく。莊宗、梁を滅すや、嗣源、功、最も高し。中書令蕃漢馬步總管となり、命を受けて、鄴を討ち、叛卒の推す所となる。鄴より汴に趨き、洛に入り、遂に位に卽く。名を亶と改む。

契丹の阿保機卒す。子德光立つ。

閩王王審知卒す。子延翰立つ。驕淫殘暴、其下、之を弑して、其弟延鈞を立つ。後、帝と稱す。名を璘と更む。

吳王楊溥、帝と稱す。

南平王高季興卒す。子從誨立つ。

德光は卽ち遼の大宗なり

楚王馬殷卒す。子希聲立つ。後、希聲卒す。希範立つ。

吳越王錢鏐卒す。子元瓘立つ。

夏州の李仁福卒す。子彝超嗣ぐ。

西川の孟知祥、東川を併す。知祥を以て蜀王となす。

唐の秦王從榮、驕狠なり。自ら時論の與みせざるを知り、常に嗣たるを得ざるを懼る。唐主、疾に寢す。遽に牙兵千人を率ゐて、端門の下に至り、將に入らむとす。禁衞、之を討つ。從榮の兵潰ゆ。走つて、府に歸る。皇城使、之を斬る。唐主悲駭、疾劇し、遂に殂す。唐主、性、猜忌せず、物と競ふなし。登極の年、既に六十を踰ゆ。毎夕、宮中に於て、香を焚いて天に祝して曰く、某は胡人、亂

評は唐の明宗五代離亂の世を通じての名君なり

に因つて衆に推さる。願はくは、天、早く聖人を生じて、生民の主となせと。在位八年。改元するもの二、曰く、天成、長興。内に聲色なく、外に遊畋なく、宦官に任せず、内、藏庫を廢し、廉吏を賞し、贓蠹を治す。書を知らずと雖も、行ふ所、道に暗合し、年穀屢ば豊に、兵革用ゆる罕なり。五代に校ぶるに、粗ぼ小康となす。子宋王立つ、之を閔帝となす。

【閔帝】名は從厚、明宗の次子なり。位に卽いて、治を爲すに志あり。然れども、其要を知らず、寛柔にして斷少し。

蜀の孟知祥、帝と稱す。

唐の潞王、鳳翔に反す。兵を擧げ、長驅して洛陽に至る。閔帝、出奔す。位に在つて、應順と改元す。潞王立つ。

【潞王】名は從珂、本姓は王氏、明宗の養子なり。少にして、明宗に從ひ、征伐して功名あり、衆心を得たり。事を用ゆる者、之を忌む。從珂、鳳翔に鎭す。閔帝、命じて、鎭を河東に移す。將佐、以爲へらく、鎭を離るれば必ず全き理なしと。乃ち檄を鄰道に移し、兵を起して入りて、帝側を淸む。從珂、陝に至る。諸軍、皆、迎へ降る。洛に至る。宰相馮道等、百官班迎し、遂に位に卽き、人を遣して、閔帝を衞州に鴆殺す。

蜀主孟知祥殂す。子昶立つ。

夏州の李彝超卒す。兄彝殷、之に代る。

石敬塘

評　石敬塘が自家權勢の爲めに援を契丹に求むる所、蔣介石がソ聯に依頼すると同一轍

閩人、其王璘を殺して、其子繼鵬を立て、名を昶と更む。

唐主、初め、河東節度使石敬塘と、素より相悅ばず。唐主立つ。敬塘、已むを得ずして入朝し、尋いで、鎭に歸り、陰に自全の計をなす。唐主、之を移す。遂に反し、援を契丹に求む。契丹、唐兵を敗り、敬塘を立てて晉帝となす。兵を引いて、洛陽に向ふ。唐主、自ら焚いて死す。在位三年ならず、改元するもの一、曰く清泰。唐は、莊宗より、是に至るまで、四主、凡そ一十四年。

晉

【晉高祖皇帝】姓は石氏、名は敬塘、沙陀の人、唐の明宗の婿なり。

石敬塘表して契丹に臣事す

初め、從珂と共に、皆、勇力あつて善く鬬ふ。明宗に事へて、皆功あり、內相忌む。從珂、帝と稱す。敬塘、河東より來朝す。將佐、皆勸めて、之を留めしむ。時に久しく病んで骨立す。唐主、以て虞となさず、遂に鎭に歸るを得たり。公主、洛陽に在り、辭して歸るや、唐主、醉うて曰く、何ぞ、暫らく留まらずして、遽に歸るや。石郎と反せむと欲するかと。敬塘、之を聞いて益す懼る。尋いで、命じて、移つて、鄆州を鎭せしむ。敬塘、命を拒む。唐主、兵を發して、之を討つ。桑維翰、敬塘の爲に、表を草して、契丹に臣と稱し、事ふるに、父の禮を以てし、約す、事捷たば、地を割かむと。劉知遠、以爲へらく、太だ過ぎたり、厚く金帛を賂はば、其兵を致

すに足れり、必ずしも許すに土田を以てせざれ、恐らくは、異日大に中國の患をなさむと。敬塘、聽かず。表、至る。契丹主、大に喜び、騎五萬を將ゐて來り、唐兵と晉陽に戰つて大に之を敗る。契丹主、敬塘を立てて帝となし、國を晉と號す。幽、薊、瀛、莫、涿、檀、順、新、嬀、儒、武、雲、應、寰、朔、蔚、十六州を割いて、之に與ふ。契丹、晉主を以て南下し、又、唐兵を破つて、潞州に至る。契丹、北に還る。晉主、引いて南す。唐の將校、皆、狀を飛ばして以て迎ふ。唐主、殂す。晉主、入つて、洛に都す。既にして、汴に還る。

吳の徐知誥、帝と稱し、吳主溥を奉じて、讓皇となす。初め、徐溫、知誥に命じて、昇州を治めしむ。繁富を致し、城市府舍、甚だ盛なり。溫、自ら徙つて、之に居る。知誥、廣陵に入つて、吳政を輔く。溫、卒す。知誥、中書令を以て、昇に鎮して、其子を留めて政を輔けしむ。金陵城を廣くす。吳、知誥に大元帥を加へ、齊王に封じ、殊禮を加ふ。是に至つて、吳の禪を受く。知誥は、もと徐州李氏の子なり。自ら唐の後といひ、國を唐と號し、尋いで、姓李を復し、名を昪と改む。之を南唐となす。

南唐

大遼（西紀九三七）

契丹、國を改めて大遼と號す。

閩の王曦、其主昶を弑して自立す。

吳越王錢元瓘卒す。子弘佐嗣ぐ。

南漢王劉龑、又名を龔と更む。尋いで、殂す。子玢、立つ。
晉主在位、七歳ならずして殂す。改元するもの一、曰く天福。齊王立つ、之を出帝となす。

【出帝】名は重貴、高祖の兄の子なり。高祖、終に臨んで、幼子重瓘に命じ、宰相馮道を拜せしめ、其輔立を欲す。景延廣の議に以へらく、國家多難、宜しく長君を立つべしと。遂に重貴を立つ。延廣、事を用ゆ。

南唐主李昪、殂す。子璟、立つ。

閩王の弟王延政、建州に據つて、殷帝と稱す。

南漢主劉玢の弟弘熙、玢を弑して自立し、名を晟と改む。

閩の朱文進、其主王曦を弑して自立す。殷主延政、兵を遣して、之を討つ。閩人、文進を殺して、首を殷に傳ふ。殷、國號を更めて閩といふ。唐人、攻めて建州を拔く。延政、出でて降る。閩亡ぶ。

唐、福州を攻む。克たず。後、吳越、兵を遣して、之を取らしむ。

初め、晉の高祖、契丹に事へて、甚だ謹む。少主、位に卽くに至つて、景延廣、議を主どり、哀を告ぐるに復た臣と稱せず。契丹、大に怒る。延廣、又、其回圖使を囚へ、既にして、歸らしめ、大言して曰く、歸つて、而の主に語れ。先帝は北朝に立てらる、故に臣と稱して表を奉る。今上は、乃ち中國の立つる所、隣となつて、孫と稱すれば足らむ。翁怒らば來り戰へ、孫に十萬、磨劍を橫へて相

待つありと。桑維翰、屢ば遜辭以て契丹に謝せむを請ふ。毎に延廣に沮まる。是に於て、契丹、入寇して、河を渡る。晉主、自ら將として、及び李守貞等を遣し、道を分つて、之を擊つ。契丹、敗走す。契丹、再び相州に至つて、引いて還る。晉主、又自ら將として、之を追ふ。契丹、兵を旋して南下す。晉人、之を擊つ。契丹、又敗走す。晉主、既に再び勝ち、契丹は畏るるに足らずと意ふ。契丹主、大舉して入寇す。晉將杜威、降る。契丹、兵を遣して汴に入り、晉主を執へて、以て其國に歸る。在位五年、改元するもの一、曰く開運。晉は、高祖より、是に至るまで再世、一十二年にして亡ぶ。

契丹主、大梁に入る。胡騎四出して剽掠す、之を打草穀といふ。丁壯は鋒刃に斃れ、老弱は溝壑に委し、東西兩畿より、鄭滑曹濮に及ぶまで、數百里の間、財帛殆んど盡く。契丹主、判三司劉昫に謂つて曰く、契丹の兵、優賜あるべしと。遂に都城士民の錢帛を括し、使者數十名を遣して、諸州に括し、皆迫るに嚴誅を以てす。人、生を聊んぜず。括し至るや、初めより、頒給なく、皆輦して歸らむと欲す。中外怨憤、皆之を逐はむを思ひ、所在盜起る。契丹主曰く、我、中國治め難きこと、かくの如くなるを知らずと。汴に居ること三月にして還る。晉の劉知遠、先つこと一月、位に晉陽に卽く。

漢

一紙の制書を以て自ら虎口に投ぜんや

【漢高祖皇帝】姓は劉氏、初名は知遠、沙陀の人なり。晉祖敬塘に、兵閒に事へて、功、最も多し。晉祖、河東に在るや、唐の潞王、之を移して、鄆を鎮せしむ。知遠曰く、明公、久しく兵に將として、士卒の心を得たり。今、形勝の地に據つて、士馬精强なり。若し兵を稱げ、檄を傳ふれば、帝業成るべし。奈何ぞ、一紙の制書を以て自ら虎口に投ぜむやと。遂に命を拒む。唐、將を遣して之を攻む。克たず。晉祖、兵を擧げ、唐を滅して洛陽に入る。知遠、時に侍衞馬軍都指揮使たり。漢兵を分つて營に入れ、契丹の兵を寺に館す。城中肅然たり。後、晉祖、知遠を以て河東に鎮せしむ。晉祖、殂す。遺命して、知遠を以て、入つて政を輔けしむ。晉人之を匿す。

帝羈契丹主兀欲之を遼の世宗となす

知遠、之に由つて、朝廷を怨む。契丹、しきりに入寇す。晉、知遠を以て行營都統となすと雖も、知遠、行かず。契丹、晉を滅して大梁に入る。知遠、帝を晉陽に稱す。契丹去る。乃ち太原を發して、洛に入り、遂に汴に入り、國を漢と號し、後、名を暠と更む。

契丹主耶律德光、歸つて、殺胡林に至り死す。腹を剖き、鹽を實たして、載せて去る。人、之を帝羈といふ。子兀欲、立つ。

楚王馬希範、卒す。子希廣、立つ。

吳越王錢弘佐、卒す。弘倧、立つ。其下、之を廢して、弘俶を立つ。

漢主殂す。在位一年、元を乾祐と改む。子周王立つ、之を隱帝と

なす。

【隱帝】名は承祐、年十八にして、位に卽く。

之より先、漢祖、弟崇を以て、太原に尹とし、留守河東節度使となす。崇、郭威と隙あり。是に至つて、威、樞密使侍中となつて政を執る。崇、自全の計をなし、勇士を選募し、亡命を招納し、甲兵を繕し、府庫を實たし、財賦を上供するを罷め、朝廷の詔令、多くは稟承せず。

荆南の高從誨、卒す。子寶融、軍府に知たり。

河中の李守貞、反す。郭威、諸軍を督し、討つて、之に克つ。守貞、自殺す。

漢、郭威を以て、鄴都の留守となす。

楚王馬希廣の兄希萼、希廣を殺して自立す。

漢王、卽位より以來、同平章事楊邠、機政を總べ、樞密使郭威、征伐を主り、侍衞指揮使史弘肇、宿衞を典り、三司使王章、財賦を掌る。邠、頗る公忠、弘肇、京師を察し、道、遺ちたるを拾はず。章は、遺利を捃拾して、供饋乏しからず、國家相安し。弘肇、嘗て謂ふ、天下須らく長槍大劍を用ゆべし。安んぞ毛錐子を用ゐむや。章曰く、若し毛錐なくむば、財賦何に由つて取辨せむと。章、文人を輕んず。嘗て曰く、この輩、算を握るも、縱橫を知らず、何ぞ用に益あらむと。漢主の左右嬖倖、寢く事を用ゐ、親戚政を干

す、邠等、毎に之を裁抑す。漢主、益す壯、大臣に制せらるるを厭ふ。楊邠、嘗て事を前に議す。曰く、陛下、惟だ聲を禁せよ。臣等の在るありと。漢主、積んで平らかなる能はず、左右因つて之を譖す。乾祐二年。邠、弘肇、章を殺し、密詔を遣して、郭威を鄴に殺さむと欲す。將佐、威に勸め、入朝して自ら訴へしむ。威、大軍を引いて至る。漢主、兵を遣して、之を拒ぐ。或は降り、或は戰はずして還り、漢主、亂兵の爲に弑せらる。威、太后に白して、武寧節度賛を迎へしむ。未だ至らず。契丹の入寇を聞き、威を遣し、兵に將として、之を擊たしむ。威、澶州に至る。將士、大に譟ぎ、黄旗を裂いて、以て威の體に被らしめ、共に之を扶抱して、萬歳を呼び、地に震ふ。威を擁して南行し、遂に漢に代る。漢、二世四年にして亡ぶ。

周

【周太祖皇帝】姓は郭氏、名は威、太原の人なり。唐の莊宗、宮人柴氏あり。其家に歸つて、姻を擇ぶ。一日、門に窺ひ、疾走して過ぐる者あるを見る。柴氏、大に驚いて、何人ぞと問ふ。告ぐるもの曰く、從馬軍使郭雀兒なりと。柴氏、之に嫁せむと欲す。父母、肯んぜずして曰く、汝は帝の左右の人、當に節度使に嫁すべし。奈何ぞ、此人に嫁せむやと。柴氏、堅く他人に嫁せず、竟に威に歸す。

漢祖、河東に鎮するや、威、孔目官となる。契丹、汴に在り、威、漢祖に勸めて兵を擧げしめ、遂に帝業を爲す。漢の隱帝の時、威、專ら征伐を主る。隱帝、之を殺さむと欲す。克たず。威、兵を擁して、汴に入り、既にして、出でて契丹を禦ぐ。軍士、擁して、汴に還る。時に已に贇を徐州に迎ふ。乃ち漢の太后の令を以て贇を廢して湘陰公となし、威を監國となし、尋いで位に卽き、自ら周の號叔の後なりと謂ひ、國を周と號す。贇は崇の子なり。崇、初め、隱帝害に遇ふを聞き、兵を起して、南に向はむと欲す。贇を迎立するを聞くに及び、すなはち曰く、吾が兒、帝とならば、吾、復た何をか求めむやと。贇、廢せられて死す。崇、乃ち帝を晉陽に稱す。有つ所は並、汾、忻、代、嵐、憲、隆、蔚、沁、遼、麟、石、十二州の地なり。其臣に謂つて曰く、顧るに、我は是れ何の天子、汝等は是れ何の節度使かと。之を北漢となす。子承鈞を遣して、周を伐つ。克たず。使を遣して、師を契丹に乞ふ。契丹、北漢主を策名し、名を旻と更む。

契丹の述軋、兀欲を弑して自立す。述律、討つて述軋を殺して之に代る。

楚は、希廣、希萼より以來、相攻奪して、寧歲なし。其下、又、希萼を廢して、希崇を立つ。南唐、邊鎬を遣して楚を擊たしむ。希崇、降る。南唐、馬氏の族を金陵に遷す。楚亡ぶ。

故の楚將劉言、朗州より潭を攻む。邊鎬走る。言、湖南を取り、命を周に請ふ。周、言を以て朗を鎮せしめ、王逵に潭を鎮せしむ。逵、襲うて、言を朗に殺し、周行逢を以て朗を守らしむ。逵、潭に還る。後、又、行逢を以て潭を鎮せしめ、逵、自ら朗に居る。

周主、在位三年にして殂す。改元するもの一、曰く廣順。晉王、立つ、之を世宗皇帝となす。

【世宗皇帝】名は榮、本姓は柴氏、周祖の妻の兄柴守禮の子なり。周祖、子なし、故に之を養ふ。周初、節鎮を領す。既にして、開封に尹たり。晉王に封ぜらる。周主、終に臨んで、晉王に命じて、政を聽かしめ、尋いで、位に卽く。北漢主、周主の殂するを聞き、大に喜び、兵を契丹に請ふ。契丹、將楊袞を遣して、萬騎に將たらしめ、北漢主、自ら三萬人に將として來る。周主、自ら將として、之を禦がむと欲す。群臣、皆、諫む。主曰く、崇、大喪を幸なりとし、朕の年少を輕んず、是れ必ず自ら來らむ。朕、往かざるべからず。吾が兵力の强を以て崇を破る、山の卵を壓するが如きのみと。馮道、力めて爭ふ。惟だ王溥勸めて行かしむ。北漢主、高平に軍す。周の前鋒、之を擊つ。北漢の兵、卻く。主、其遁去を慮り、諸軍を趣して、亟に進む。後軍、未だ至らず、衆心、危懼す。而して、主の志氣、益す銳、合戰未だ幾ならず、周の右軍の將樊愛能、何徽、先づ遁れ、右軍潰ゆ。步軍千餘、甲を解いて降る。主、軍勢の

趙匡胤

國家の安危此一擧に在り

危きを見、自ら親兵を引いて矢石を犯して督戰す。督衞の將趙匡胤曰く、主、危きこと此の如し。吾が屬、何ぞ死を致さざるを得むと。又、禁兵の將張永德に謂つて曰く、賊氣驕れり、破るべきなり。公、兵を引いて高きに乘じ、西に出でて、左翼となれ。我、右翼となつて、以て之を擊たむ。國家の安危、この一擧に在りと。永德、之に從ひ、各二千人に將として、進み戰ふ。匡胤、身、士卒に先んじ、馳せて其鋒を犯す。士卒死戰、一、百に當らざるなく、北漢の兵、大に敗る。楊袞、敢て救はず。北漢主、晝夜北走、わづかに晉陽に入るを得たり。周主、樊愛能、何徽、及び所部軍使以上七十餘人を收め、之を責めて曰く、汝輩、戰ふ能はざるに非ず、正に

評　周世宗の精兵は多を務めず、農夫百を務めず、戰士一を養ふ能はず、奈何ぞ民の膏血を浚うて此無用の物を養はんや。政に志すべきなり。

朕を以て奇貨となして、劉崇に賣與せむと欲するのみと、悉く之を斬る。之より、驕將惰卒、初めて、懼るる所を知り、姑息の政を行はず。張永德、盛に趙匡胤の智勇を稱し、權に殿前都虞候たり。周主、侍臣に謂つて曰く、兵は精を務めて、多きを務めず、農夫百、未だ戰士一を養ふ能はず。奈何ぞ、民の膏血を浚うて、この無用の物を養はむやと、乃ち命じて、大に諸軍を簡せしめ、又諸道に詔して、天下の壯士を募り、咸な闕に詣らしめ、匡胤に命じて、其尤なる者を選ばしめて、殿前諸班となし、其騎步諸軍は、各、將帥に命じて、之を選ばしむ。之に由つて、士卒精强、向ふ所、克捷す。

周、北漢を攻む。汾、遼、憲、嵐、石、沁、忻の州、皆、周に入

る。周主、晉陽を攻む。克たず。軍を引いて還る。

北漢主劉旻、殂す。子鈞、立つ。

周、蜀を伐ち、秦、階、成、鳳の州を取る。

周、南唐を伐つ。唐、兵を遣し、壽州に拒いで敗る。周主、自ら將として、大に唐兵を正陽に敗る。唐將皇甫暉、姚鳳、清流關を保つ。主、趙匡胤に命じ、道を倍して、之を襲はしめ、暉、鳳を擒にし、滁州に克つ。周師、楊、泰、光、舒、蘄の州を取る。唐兵、周師を拒いで、復た泰州を取り、楊州を攻む。周主、匡胤に命じて六合に屯せしむ。唐兵、來り攻むるや、奮擊して、大に之を破る。將士、力を致さざる者あれば、匡胤、陽つて、督戰をなし、劍を以て、其皮笠を斫り、明日、遍ねく其笠を閲し、劍跡ある者數十人、皆、之を斬る。之に由つて、部兵敢て死を盡さざるなし。周主、大梁に還り、兵を留めて、壽州を圍む。唐兵、江北諸州を復す。周の守將、皆棄てて去る。兵を併せて、壽州を攻む。周主、復た自ら將として、壽に如く。唐人、城を以て降る。周主、大梁に還る。既にして、復た自ら將として、濠泗を攻む。皆、降る。進んで楚州を攻む。兵を遣して、楊泰を取る。周主、楚州に克ち、還つて、楊州に至る。唐主、使を遣して、盡く江北の地を獻ず。周主、乃ち還る。

唐主、名を景と更め、帝號を去り、周の正朔を奉ず。

朗州の王逵、潘叔嗣の爲に殺さる。將吏、潭州の周行逢を迎へて

朗に入らしむ。行逢、潭、朗を併せて、之を有つ。

南漢主劉晟、殂す。子鋹、立つ。

周主、自ら將として、契丹を伐ち、瀛、莫、易の州を取る。京を離ること四十二日にして、關南悉く平らぐ。議して、幽州に趨かむとす。不豫に會して止む。瓦橋關を以て雄州となし、益津關を霸州となし、戍を置いて還る。往還六十日。

趙匡胤、之より先、殿前都指揮使となり、從つて、淮南を攻む。又、從つて契丹を征す。是に至つて、殿前都點檢となる。

周主、在位六年にして殂す。改元するもの一、曰く顯德。周主、藩に在つて韜晦す。位に卽くに及びて、首として、高平の寇あり。

評　周の世宗は稀に見る英主なりの惜い哉早世す、故に帝業完からず

人、初めて其英武に服す。號令嚴明、人敢て犯すなし。城を攻め、敵に對するや、矢石左右に落つれども、略ぼ容を動かさず、機に應じ、策を決する、人の意表に出づ。又、政事に勤め、姦を發き、伏を摘し、聰察、神の如し。閒暇には、儒者を召して史を讀ましめ、大義を商榷す。性、絲竹珍玩の物を好まず、常に言ふ。朕、必ず喜に因つて人を賞し、怒に因つて人を刑せずと。文武參用、各其能を盡くす。人、其明を畏れて、其惠に懷く。故に能く敵を破り、地を廣め、向ふ所前なし。登遐の日、遠近哀慕す。子梁王立つ、之を恭帝となす。

【恭帝】名は宗訓、七歳にして位に卽く。

趙匡胤を以て歸德節度使となし。明年春、定言に鎭せしむ。契丹入寇す。匡胤をして兵に將として、之を禦がしむ。陳橋驛に至るや、軍士擁し還つて策立す。周主在位半年、遂に宋に禪る。周は、太祖より、是に至るまで、三世、二姓、十年にして亡ぶ。

宋

【宋太祖皇帝】姓は趙氏、名は匡胤、其先は涿人なり。相傳へて、漢の京兆廣漢の後となす。父弘殷、洛陽の禁衞將校となる。匡胤を甲馬營中に生む。赤光室に滿つ、營中異香あること一月、人、之を香孩兒の營といふ。少にして、辛文悅に從つて學ぶ。文悅、嘗て駕を邀ふるを夢む、乃ち匡胤なり。周の世宗の時、軍政を掌る。凡そ六年。士卒、其恩威に服す。數ば征伐に從つて大功を立つ。世宗、一日文書篋中に於て、一木書を得たり。曰く點檢、天子と作ると、時に、張永德、點檢たり。世宗、乃ち之を遷して、易ふるに、匡胤を以てす。世宗殂す。恭宗卽位の明年、命じて、宿衞を領せしめ、契丹を禦ぐ。時に、主少く、國危く、中外始めて推戴の議あり。大軍、既に出づ。軍校苗訓、日下に復た一日あつて、黑光相盪すを見て、指して曰く、之れ天命なりと。夕に陳橋驛に次す。軍士聚議し、先づ點檢を立てて天子となし、然る後に、北征せむといひ、環列して、旦を待つ。點檢、醉臥して知らざるなり。黎明、軍士甲を

擐し、兵を執り、直に寢門を叩いて曰く、諸將主なし、願はくは、大尉を策して、天子となさむと。點檢、驚起し、衣を披けば、相與に扶け出で、被らすに黃袍を以てし、羅拜して、萬歲を呼び、擁して、馬に上ぼせて南行す。之を拒めども可かず。乃ち轡を攬つて、諸將に誓ひ、仁和門より入る、秋毫も犯す所なし。恭帝、遂に位を禪る。領する所の節鎭、宋州の歸德軍なるを以て、故に國號を宋といふ。卽位の初、陰に群情を察せむと欲し、頗る微行をなす。或ひと輕しく出づる勿れと諫む。上曰く、帝王の興る、自ら天命あり。周の世宗、諸將の方面大耳の者を見れば、皆、之を殺す。我、終日側に侍するも、害する能はざるなりと。微行、愈よ數す。曰く、天命ある者は、自ら之を爲すに任かす、汝を禁ぜざるなりと。中外讋服す。

昭義節度使李筠は、故の周の宿將なり。澤に反す。上、石守信に命じて、之を討たしめ、尋いで親征す。筠、自ら焚死す。澤潞、平らぐ。

淮南の節度使李重進は、周祖の甥なり。亦た反す。上、石守信に命じて、之を討たしめ、尋いで親征す。重進、自ら焚死す。淮南、平らぐ。

荆南の高寶融、卒す。弟寶勗、之に代る。

南唐泉州の留從效、藩と稱す。

趙普

建隆二年、南唐主李景、都を南昌に遷し、其子從嘉を以て、建康を守らしむ。從嘉立つ、名を煜と更む。

上、既に筠、重進を誅し、樞密直學士趙普を召して問うて曰く、吾、天下の兵を息め、國家長久の計を爲さむとす、其道如何、普曰く、唐季以來、帝王數ば易はるは、節鎮太だ重く、君弱く、臣强きに坐するのみ。今、稍く其權を奪ふに若くはなし。其錢穀を制し其精兵を收むれば、天下自ら安からむと。又言ふ、殿前帥石守信等皆、統御の才に非ず、宜しく、他職を授くべしと。上悟る。守信等を召し、宴酣なる時、左右を屏けて謂つて、曰く、我、爾曹の力に非ずむば、是に至らず。然れども、終夕未だ嘗て枕を安くせざるなり。この位に居る者は、誰か之を爲すを欲せざらむ。守信等、頓首して曰く、陛下何すれぞ此言を出す。天命既に定まる、誰か敢て異心あらむや。上曰く、汝曹異心なしと雖も、麾下の人の富貴を欲するを如何。一旦、黃袍を以て、汝の身に加ふれば、爲すを欲せずと雖も、それ得べけむや。皆頓首して泣いて曰く、臣等、愚、是に及ばず、惟だ陛下哀矜して、生くべきの途を指示せよ。上曰く、人生、白駒の隙を過ぐるが如し。富貴を好むと爲す所のものは、多く金錢を積んで、厚く自ら娛樂し、子孫をして貧乏なからしめむと欲するに過ぎざるのみ。汝曹、何ぞ兵權を釋いて去り、出でて、大藩を守り、便好の田宅を擇んで、子孫の計を爲さざる。多く歌童舞女

一旦黃袍を以て汝の身に加ふれば爲すを欲せずと雖もそれ得べけんや

を置き、日に酒を飲んで、相安んずる、亦た善からずや。皆、拜謝して曰く、陛下臣等を念ふこと、是に至る。謂ゆる死を生かし骨に肉づくるなりと。明日、皆、疾と稱して、罷めむを請ふ。

趙普は、薊人なり。上に滁州に遇ひ、用ゐて節度掌書記となす。上、卽位の後、專ら與に謀議し、之に倚信す。

女眞、馬を貢す。

回鶻、于闐、來貢す。

建隆三年。泉州の留從效、卒す。衙將陳洪進、張漢思を推して、軍務を領せしむ。

定難節度使、周の西平王李彝興、馬を貢す。

武平、武安の鎭帥周行逢卒す。子保權、軍府を領す。衡州の太守張文表、亂を作し、兵を起して、潭州に據る。保權、表して救を宋に請ふ。

荊南の高寶勗、卒す。兄の子繼冲、之に代る。

高麗、來貢す。

乾德元年。慕容延釗等に命じ、周保權に會して、張文表を討たしむ。師、江陵より出づ。高繼冲、出でて降り、荊南平らぐ。延釗、湖南に至る。文表、さきに已に敗死す。保權、宋師の荊南に下るを聞いて、懼れて拒守す。師、進んで、之を討ち、保權を獲、湖南、平らぐ。

世々降表を草する李家

二年。宰相、范質、王溥、魏仁浦、乞うて罷む。質等は、周朝の舊相なり。唐より以來、宰相は、惟だ大政事を面奏するのみ。餘の號令刑賞除拜は、但だ熟狀を入る。質等、前朝の大臣を以て、稍や形跡を存し、事毎に劄子を具へて進呈し、退いて得る所の聖旨を批し、同列、皆、字を書して、以て之を志す。奏御の多きこと、是に始まる。質等、既に罷む。趙普を以て、同平章事とす。

王全斌に命じて、蜀を伐たしむ。乾德三年、蜀相李昊、蜀主孟昶に勸めて、出でて降らしむ。前蜀王氏の亡ぶるや、降表、亦た昊の草する所、蜀人、夜、其門に書して曰く、世、降表を修する李家と。

初め、上、宰相に命じて、前代未だ有らざる年號を擇ばしめ、以て今の元に改む。是に及びて、蜀鑑を得たり。乃ち乾德四年鑄の字あり。之を怪んで、學士竇儀を召して問ふ。曰く、むかし、僞蜀王衍に此號ありと。上歎じて曰く、宰相は、須らく、讀書の人を用ゆべしと。

五年、五星奎に聚まる。之より先、周の顯德中、竇儼、楊徽之、盧多遜、同じく諫官となる。儼、推步を善くす。嘗て曰く、丁卯の歲、五星、奎に聚まり、之より、天下太平ならむ。二拾遺、之を見む、儼は預らざるなりと。是に至つて、果して然り。

夏州の李彝興、卒す。子光叡、軍務を領す。

開寶元年、北漢王劉鈞、殂す。養子繼恩、立つ。郭無爲、之を弑して、其同母弟繼元を立つ、皆、異姓の子なり。

雷德驤、大理寺に判たり。官屬、堂吏と宰相に附會し、擅に刑名を增減す。德驤、憤惋し、直に講武殿に詣つて、之を奏す、併せて言ふ、趙普、强ひて人の第宅を市ひ、財賄を聚斂すと。上、怒つて叱して曰く、鼎鐺、尙ほ耳あり。汝、趙普は、吾が社稷の臣たるを聞かざるかと。柱斧を引いて、其二齒を擊折し、命じて、曳き出さしめて、之を黜く。

鼎鐺尙ほ耳あり

二年。曹彬等に命じて、北漢を伐たしめ、尋いで、親征し、太原を攻む。城、久しく下らず。兵を百草池に頓す。暑雨に中つて、軍中疾疫す。詔して、師を班へす。

上、位に卽いてより、或は微行して、功臣の家に幸し、測るべからず。趙普、退朝する每に敢て衣冠を脫せず。一夕、大に雪ふる。普、意へらく、上、復た出でずと。之を久しうして、門を叩く聲を聞く、異、甚し。亟に出づれば、上、雪中に立つ。普、惶恐して、迎へ拜す。普の堂に卽き、重裀を設けて地坐し、炭を熾にし、肉を燒く。普の妻、酒を行ふ。上、嫂を以て、之を呼ぶ。普、從容として、問うて曰く、夜、久しく寒甚し。陛下何を以て出づる。上曰く、吾、睡れども著く能はず、一榻の外、皆、他人の家なり。故に、來つて卿を見る。普曰く、陛下、天下を少とするか。南征北伐、是

評　趙普の所説太原は西北二邊に當る一擧して下らしむれば邊患我獨り之に當らむ云々正に大陸經營上大に用ふべし

れ其時なり。願はくは、成算の向ふ所を聞かむ。上曰く、吾、太原を取らむと欲す、普、默然、やや久しうして曰く、臣の知る所に非ざるなり。太原は西北二邊に當る。一擧して下らしむれば、邊患、我獨り之に當らむ。何ぞ姑く留めて、以て諸國を削平するを俟たざる。かの彈丸黒子の地、將た何の逃るる所ぞ。上笑つて曰く、吾が意、正に爾り、姑く卿を試みるのみと。是に於て、師を荊湖に用ゐ、繼いで、西川を取る。嘗て、北漢の諜者に因つて、北漢主鈞に語つて曰く、君が家、周氏と、世、仇なり、宜なり、屈せざるや。今、我、爾と閒あるなし。何の爲にかこの一方の人を困むと。鈞、諜者を遣して、復命して曰く、河東の土地兵甲、中國の什の一に當

評　趙普は所

るに足らず。區區として、此を守るは、蓋し漢氏の血食せざるを懼るればなりと。上、其言を哀んで、鈞の世を終るまで、大軍を以て北伐せず。繼元の立つに及びて、始めて兵を用ゆ。

この歳、契丹、其主述律を弑す。穆宗と號す。其伯父兀欲の子明記を迎立す、名を賢と更む。

三年。潘美に命じて、南漢を伐つ。四年、廣州に克つ。劉鋹、降る。南漢、亡ぶ。

六年。交趾の丁璉、上表して内附を求む。詔して、以て靜海節度使安南都護となす。

趙普、相を罷めて、河陽三城節度使を領す。普、沈毅果斷、天下

謂宋の社稷の臣なり

を以て、己の任となす、嘗て、某人を除して某官となさむと欲す。上、用ゐず。明日、又、之を奏す。上、怒つて、其奏を裂く。普、徐に拾うて以て歸り、補綴して以て進む。上、悟つて、乃ち之を可とす。又、功を立てて、當に官を遷すべき者あり。上、素より、其人を嫌うて與へず。普、力め請うて、下さむを謂ふ。曰く、朕、固く與へざれば奈何。普曰く、刑賞は天下の刑賞、安んぞ、私の喜怒を以て、之を專らにするを得むと。上、聽かずして起つ。普、之に隨ふ。上、宮に入る。普、宮門に立つて去らず。上、之を可とす。普、常に大甕を閤後に設け、表疏の意可とせざる者は、其中に投じて、之を焚く。其多く謗を得る者は、此を以てなり。雷德驤の子、又、之を訐く。上、始めて、普を疑ふ。之より先、參知政事を置いて、以て普に副すと雖も、制を宣せず、押班せず、知印せず、政事堂に升らず。是に至つて、始めて、二參政に詔して、政事堂に昇つて、同じく政を議し、更に知印押班、普と齊しからしむ。未だ幾ならずして、普、遂に罷む。薛居正、呂餘慶等、其後、繼いで、相となる。

七年。曹彬に命じて、江南を伐たしむ。上、屢ば使を遣し、江南國主李煜に諭して、入朝せしむ。至らず。乃ち、彬及び潘美等を以て、之を討たしめ、戒むるに、切に生民を暴略するなく、務めて、威信を廣くし、自ら歸順せしめて、須らく急に擊つべからざるを以

てし、匣劍を取つて、彬に授けて曰く、副將より下、命を用ゐざる者は之を斬れと。美以下、皆、色を失ふ。王全斌、蜀を平らげて、多く人を殺せしより、上毎に之を恨む。彬、性仁厚、故に專任す。之より先、江南の樊若水、進士に擧げられて、第せず。上書して事を言ふ。報せず。乃ち魚を釆石江上に釣り、繩を以て、江の廣狹を度り、闕に詣つて、策を陳ず。上、其言を用ゐ。荆南に令して、大艦を造つて、浮梁となし、以て師を濟す。是に至つて、尺寸を差へず。

八年、曹彬、金陵を圍むこと急なり。李煜、徐鉉を遣して、入朝せしめ、兵を緩うせむことを求む。鉉、言ふ。煜、小を以て大に事ふる、子の父に事ふるが如しと。其說、數百を累ぬ。上曰く、爾、父子といふ、兩家となして可ならむやと。鉉、對ふる能はず。尋いで、復た至り、奏して言ふ、江南、罪なしと。辭氣益す厲し。上、怒つて、劍を按じて曰く、多言を須ゐず、江南亦た何の罪あらむ。惟だ天下は一家、臥榻の側、豈に佗人の鼾睡を容れむやと。鉉、惶恐して退く。金陵、圍を受けて、春より冬に徂き、勢、愈よ窮蹙す。彬、終に之を降さむと欲し、しきりに、人をして、煜に告げしめて曰く、某日、城必ず破れむ、宜しく早く之が所を爲すべしと、一日、彬、疾と稱す。諸將、來り問ふ。彬曰く、彬の疾は、藥の能く癒やす所に非ず。諸公、若し共に信誓をなして、城を破るに、妄

臥榻の側豈に佗人の鼾睡を容れんや

に一人を殺さざれば、彬の病、癒えむと。諸將、皆、許諾し、香を焚いて約誓す。翌日、城陷る。煜、出でて降る。南唐亡ぶ。捷書至る。上、泣いて曰く、宇縣の分割、民、其禍を受く。城を攻むるの際、必ず横に鋒鏑に罹る者あらむ。哀むべきなりと。彬、還る。舟中、惟だ圖籍衣衾のみ、閤門より、其榜子を通じて曰く、敕を江南に受け、事を幹して回ると。其伐らざること、かくの如し。

評　此所趙匡胤人君たるの度を示す

九年、吳越王錢俶、來朝す。辭して歸るや、上、賜ふに黄袱を以てす。封緘甚だ固し。曰く、途中にして、宜しく密に觀るべしと。之を啓くに及べば、皆、群臣俶を留めむを乞ふの章疏なり。俶、感懼す。

上、西京に如き、宣祖の安陵に謁す。

夏四月、郊す。都民の垂白なる者相謂つて曰く、我輩、少より離亂を經たり、圖らざりき、今日復た太平天子の儀衞を觀むとはと。泣下るものあり。

上、留まつて洛陽に都せむと欲す。群臣咸な諫む。上曰く、吾、長安に都せむとす。晉王、叩頭して曰く、德に在つて險に在らず。上曰く、吾が將に西遷せむとするものは、山河の勝に據つて、冗兵を去らむと欲す。晉王の言、まことに善し。今、しばらく之に從はむ。百年を出でずして、天下の民力殫きむと。乃ち大梁に還る。

上崩ず、在位十七年。改元するもの三、曰く建隆、乾德、開寶。

評　趙匡胤仁孝豁達にして大度あり。陳橋の變、衆心に迫らしたること廿四朝を通じて賢英の主とい ふべし

壽五十。上、仁孝、豁達にして大度あり。陳橋の變、衆心に迫らる。京師に入るに泊びて、市、肆を易へず。嘗て、一日朝を罷め、便殿に坐して樂まざるもの、之を久しくす。左右、其故を問ふ。上曰く、爾、天子と爲る。容易なりと謂へるか。適ま快に乘じて、一事を指揮して誤る。故に樂まざるのみと。嘗て、近臣を紫雲樓下に宴し、因つて、民事に論及し、宰相に謂つて曰く、愚下の民、菽麥を分たずと雖も、藩侯爲に撫養せず、務めて、苛虐を行ふは、朕、斷じて之を容さずと。

開寶の初、京城及び大内を修め、營繕し畢る。上、寢殿に坐し、諸門を洞開せしむ。皆、端直軒豁、壅蔽あるなし。因つて左右に謂つて曰く、是れ、我が心の如し、少しく邪曲あれば、人、皆、之を見むと。

蜀を平らぐるの後、嘗て、其兵百餘を擇んで、川班殿直となし郊禮して賞を行ふに、御馬直扈從を以て、特に給を增す。川班、登聞鼓を擊ち、例を援いて陳べ乞ふ、上、怒つて曰く、朕の與ふる所は、卽ち恩澤たり、豈に例あらむやと。其妄訴する者四十餘人を斬り、餘は悉く諸軍に配隷し、遂に其直を廢す。

内臣、後唐に事ふるに逮ぶ者あり。上、問ふ、莊宗英武、天下を定め、國を享くること久しからざるは、何ぞやと。其人、其故を言ふ。上、髀を撫して、嘆じて曰く、二十年、河を夾んで戰爭し、天

下を取り得るも、軍法を用ゐて約束する能はず、まことに、兒戲たり。朕、今士卒を撫養して、爵賞を吝まず、苟くも、吾が法を犯せば、惟だ劍あるのみと。

五代以來、藩鎭强盛、上、漸を以て之を削り、諸節鎭を罷めて、專ら儒臣を用ゐ、郡國を分理し、以て節鎭の橫を革む。又、諸州の通判を置き、以て刺史の權を分たしむ。之より諸侯勢輕くして禍難作らず、專ら民力を愛養するを務む。貢獻を罷め郤け、羨餘を進むるを禁ず。常に澣濯の衣を衣、寢殿は、靑布、葦簾を緣す。晚節、讀書を好む。嘗て、歎じて曰く、堯舜の世、四凶、投竄に止まる、何ぞ近代法網の密なるやと。

評　太祖周の恭帝の卒去に當り服喪す前朝其例なき所なり

諸國を削平するに必ず之を招き、至らずして後に、兵を用ゐ、其既に降るに及びて、皆戮を加へず、禮して、之を存し、其世を終らしむ。

嘗て、武成王の廟に幸し、從祀を觀るに白起あり、指して曰く、起、已降を殺す、不武なりと。命じて之を去らしむ。

周の恭帝、鄭王に封ぜられ、後、房州に遷る。上、辛文悅の長者なるを以て、房州の守たらしむ。恭帝、上に先つこと二年、始めて卒す。上、哀を發して、朝を輟むること十日、還つて葬ること、禮の如くす。

上、初め、京に入る時、周の韓通、節に死す。追贈、優厚なり。

學士の草制は樣に依つて葫蘆を畫くのみ

王彥昇命を棄てて、殺を專らにす。終身、節鉞を授けず。受禪の際、倉卒、未だ恭帝の禪制あらず。學士陶穀、之を懷中より出す。上、之を薄しとす。穀、久しく翰林に在つて頗る怨望す。上曰く、吾聞く、學士の草制は、樣に依つて葫蘆を畫くのみ、何の勞か之あらむと。卒に之を政府に登さず。

內外の官、時望ある者姓名を籍記し、以て不次の選用を待つ。職に稱ふ者は、多く久任して遷らず。銓選法を定め、擧主連坐の法を嚴にし、贓吏の法を嚴にし、極刑に寘く者あり。五代藩鎭、苛征重斂の弊に懲りて、商征を寬うし、麴鹽酒の禁を寬うし、倉吏多く民租を入るる者は、或は棄市す。五代、多く武人を以て牧守となし、意に率つて刑を用ゆ。上、之に懲り、ことさらに入る者は、必ず罪に抵る。大辟詳覆法を定め、折杖法を定め、新刑統を頒ち、差役法を定め、版籍、戶帖、戶鈔を作る。長吏、民田を度つて實ならざる者あれば、或は之を杖流す。諸州、旱蝗あれば、饑を賑はし、租を蠲き、惟だ及ばざるを恐る。德行孝悌を擧げ、制科を親策す。擧人進士の榜を放つ。覆試法を嚴にし、殿に御して進士を親試し、書判拔萃を試み、數ば國子監に幸し、天下に詔して遺書を求む。始めて和峴定むる所の雅樂を用ゆ。始めて、劉溫叟上つる所の開寶通禮二百卷を行ふ。宰執に命じて、日々時政を記し、史館に送つて、日曆を撰せしむ。制度典章、彬彬として條理あり。太弟晉王立つ、之を

西紀九七六—九九七

評 昭憲太后國に長君あるは長久の途なりとす大に理由あり

太宗皇帝となす。

【太宗皇帝】初名は匡乂、太祖の長弟なり。太祖の京城に入るや、匡乂、首として諸將に號令し、士卒を戢めむことを請ひ、仍つて、自ら馬前に於て摽掠を戒む。太祖、禪を受くるや、乃ち光義と改名し、開平に尹とし、同平章事たり。晉王に封せらる。建隆二年、昭憲杜太后、崩ずるに臨み、太祖に謂つて曰く、汝、天下を得る所以のものを知れりや。太祖曰く、皆、祖考と太后との餘慶なり。太后笑つて曰く、然らず、正に柴氏幼兒をして天下に主たらしめしに由るのみ。汝萬歲の後、當に位を晉王に傳へ、晉王は秦王に傳へ、秦王は以て德昭に傳ふべし。國に長君あるは、社稷の福なり。太祖曰く、謹んで敎を受くと。太后、趙普を呼んで曰く、趙書記、共に吾が言を記せよ、違ふべからずと。因つて普に命じて、榻前に於て、誓書を爲らしむ。普、紙尾に署して曰く、臣普記すと。之を金匱に藏す。太祖、友愛篤く至る。晉王、嘗て疾に寢ねて灼艾す。太祖、亦た自ら灸し、以て其痛を分つ。嘗て曰く、晉王は龍行虎步、且つ生まるる時、異あり、佗日必ず太平の天子とならむ。福德は吾が能く及ぶ所に非ざるなりと。太祖、蜀に幸す。布衣張齊賢あり、十策を獻ず、召し問うて食を賜ふ。且つ咨ひ、且つ對ふ。太祖、其某策を善しとす。齊賢、固く餘策皆善なるを稱す。太祖、怒つて斥け、便ち出づ。既に還つて、晉王に語つて曰く、吾、西都に幸して、一

臣普記す

の張齊賢を得たり。吾、之を用ゆるを欲せず。佗日、留めて、汝に與へて、宰相と作さむと。蓋し、傳位の定まれる久し。太祖、不豫なり。后、王繼恩をして、皇子德芳を召さしむ。繼恩、徑に晉王を召す。王、宮中に至り、左右を散遣し、言ふ所、皆、聞くを得ず。但、遙に見る、燭影の下、王、席を離るるの狀あるを。既にして、上、柱斧を引いて地を戮し、大聲して曰く、好く之を爲せと。遂に崩ず。后、晉王を見て愕然として曰く、吾が母子の命、皆官家に託す。王曰く、共に富貴を保し、憂なきなりと。王、位に卽き、名を昊と更む。秦王廷美、開封に尹たり。改めて齊王に封せられ、德昭、武功郡王に封せらる。

使を遣し、州縣を分行して、官吏を廉察し、其優劣を第せしめ、罷軟にして任に勝へず、惰慢にして事を親らせざるものは、官を免ず。贓吏の配せられし者は、赦に遇ふも敍せず。

大理評事陳舜封。事を奏するや、口捷に、擧止、倡優に類す。問ふ。誰が氏の子ぞと。對ふるに、父、伶官たるを以てす。上曰く、汝は眞に雜類なり、豈に淸望に任ずるを得むやと。改めて、殿直を授く。

陳洪進、來朝して、漳泉二州を獻ず。

吳越王錢俶、來朝して、遂に其地を獻ず。

潘美に命じて、北漢を伐たしめ、尋いで、親征して太原を圍む。

劉繼元、出でて降る。北漢、亡ぶ。

詔して契丹を征す。易州、涿州、來り降る。上、幽州を攻む。旬を踰えて下らず、遂に師を班す。郡王德昭、從つて幽州を征す。軍中、夜、驚いて、上の在る所を知らず。德昭を立てむことを謀る者あり。上聞いて悅ばず。歸るに及びて、北征利あらざるを以て、北漢を平らぐるの賞を行はず。德昭、之を言ふ。上、大に怒つて曰く、汝が自ら之を爲すを待つて、賞するも未だ晩からざるなりと。德昭、退いて自刎す。後二年、岐王德芳、卒す。太祖の二子、相繼いで死せしより、齊王廷美、自ら安んぜず。佗日、上、傳國の意を以て、趙普に訪ふ。普曰く、太祖、既に誤る。陛下、豈に再び誤るべけむやと。是に於て、普、復た入つて相たり。廷美、遂に罪を得て、涪陵縣公に降す。普、復た知開封府李符をして、其怨望を告げしむ。南、房州に還し、尋いで、之を殺す。普、李符が言を漏らさむことを恐れ、弭、德超、曹彬を譖するの故に因つて、符、德超を薦めしを以て、符を春州に貶して卒す。

种放、終南山に隱れ、草を結んで廬となし。講習を以て務となす。後進、多く之に從つて學ぶ。上聞いて、之を召す。辭するに、母の老いたるを以てす。上、其節を高しとして、厚く錢帛を賜うて之を旌はす。

呂蒙正、參政となる。朝士あり、之を指して曰く、この子も亦た

評　呂蒙正名言一若し一たび名姓を知らば終身忘れず知るなきに如かざるなり

參政かと。蒙正、伴つて聞かず。同列、其姓名を詰らむと欲す。蒙正、之を止めて曰く、若し一たび名姓を知らば、終身忘れず、知るなきに如かざるなりと。

華山の陳摶を召し、號を希夷先生と賜ふ。

開寶寺の塔、成る。前後八年、費す所億萬。田錫、奏して曰く、衆、以爲へらく、金碧熒煌たりと。臣、以爲へらく、膏を塗り、血を釁ると。上、怒らず。

之より先、西夏の李光叡、卒す。子繼筠、嗣ぐ。又卒す。弟繼捧、嗣ぐ。繼捧、來朝して、四州の地を獻ず。其弟繼遷、叛き去り、數ば邊に入寇す。

耶律隆緒は卽ち遼の聖宗なり在位四十九年（西紀九八二至一〇三一）遼の名君なり

契丹主明記、殂す。景宗と號す。子隆緒立つ、年十二。母蕭氏、其國政を專らにす。

上、曹彬等に命じ、道を分つて、契丹を伐たしむ。彬の兵、岐溝關に大敗す。詔して、師を班さしむ。契丹、之より連年入寇す。後、女眞、契丹、其朝貢の路を隔つるを以て、之を擊たむを請ふ。許さず。女眞、遂に契丹に臣たり。

上、李繼捧に姓名を趙保忠と賜ひ、節度使を授け、命じて、夏、銀、綏、宥、靜、五州を管し、繼遷を圖らしむ。繼遷、降る。姓名を趙保吉と賜ふ。保吉、復た邊に寇す。李繼隆に命じて、之を討たしむ。保忠言ふ。既に保吉と仇を解く、乞ふ、兵を罷めむと。上、

怒つて、繼隆に命じて、先づ兵を移して、之を討せしむ。繼隆、夏州に入り、保忠を闕下に檻送す。保吉、尋いで、亦た降を請ふ。然も、復た叛く。繼隆に命じて、之を討せしむ。

蜀、既に平らぎしより後、府庫の物、悉く載せて内府に歸る。土狹く、民稠く、有司賦外の科なきにあらず。王小波、起つて盜をなす。小波、死す。李順、之に繼ぎ、成都を攻め陷れ、蜀王と僭號す。上、王繼恩に命じて、討つて、之を擒にせしむ。蜀、平らぐ。

交趾の丁連卒す。大校黎桓、其宗族を囚へて、其國を專らにす。上、初め命じて、之を討たしむ。功なし。既にして、桓、奉貢す。竟に桓を以て、交趾郡王となす。

寇準班を越えて言ふ

時に、霖潦、度に過ぐ。上曰く、朕、刑獄に於ける、心を盡す。安んぞ積陰の譴を得たると。寇準、班を越えて、對へて言ふ。某州の局吏、官錢を侵すこと若干、法に於て小過となす。陛下、之を殺す。王淮は、參政王沔の弟なり。錢數百萬を盜む、法に於て大憝となす。陛下、沔の故を以て、務めて、相容れて蔽ふ。かくの如くして、刑獄に心を盡すといふ。之を如何にして、積陰の譴なからむやと。上、卽日、淮を誅し、沔を罷む。俄にして、霖、止む。

上、崩ず。在位二十二年。改元するもの五、曰く太平興國、曰く雍熙、端拱、淳化、至道。壽五十九。薛居正、沈倫、趙普、宋琪、李昉、呂蒙正、張齊賢、呂端等、相繼いで、相となる。普は、凡そ

趙普の言行

再び入つて再び罷めらる。尋いで薨ず。普、初め、吏道を以て聞こゆ。學術寡し。太祖、嘗て勸むるに經書を以てす。普、遂に手に卷を釋かず。朝に大議ある毎に、卽ち戶を闔ぢて自ら一筐を開き、一書を取つて、之を閲す。卒するに及びて、家人、其筐を視れば、論語なり。嘗て、上に謂つて曰く、臣に論語一部あり、半部を以て太祖を佐けて天下を定め、半部を以て陛下を佐けて太平を致すと。

評　趙普の論語に於ける參考とすべし

呂蒙正

蒙正、晚に出づ。嘗て、普と並び相たり。普、甚だ之を推す。蒙正、嘗て、冊子を夾袋中に置いて、四方人材の姓名を疏し、以て選用を待つ。初め太祖、嘗て、張齊賢を以て、上に屬す。齊賢、進士に擧げらるるに至つて、上、之を上第に置かむと欲す。然も、有司、其

張齊賢

呂端糊塗す

名を第して、下に在り。乃ち、詔して、一榜、特に通判を與へ、卒に大に用ゐらるるに至る。呂端、相となる。人、謂ふ、呂相、事を作して糊塗すと。上之を知つて曰く、端、小事は糊塗すれども、大事は糊塗せずと、上位に卽いて以來、小人を以て相となす者は、盧多遜一人のみ。太子立つ、之を眞宗皇帝となす。

【眞宗皇帝】初名は元侃、襄王に封ぜらる。擧人楊礪といふ者あり、嘗て、夢に一大殿に至る。殿上に坐する者あり、之に語つて曰く、我は汝の主に非ず、來和天尊は汝の主なりと。指示して、之に謁せしむ。礪、後に進士第一なり。入つて、襄王府の記室たり。既に、謁すれば、夢中見る所の如し。太宗、嘗て、相者をして、襄王

に詣らしむ。門に及んで、返つて曰く、王門は厮役も、皆將相たり。王、知るべしと。立つて、太子となる。是に至つて位に卽く、名を恆と更む。

咸平二年、契丹、入寇す。上、親征す。大名府に至つて還る。

三年。益州の卒王均反し、大蜀と僭號す。雷有終を以て州に知とし、討つて、之を擒にす。益州、平らぐ。

范廷召、契丹を討ち、援を高陽關の都部署康保裔に求む。亟に之に赴く。廷召、ひそかに遁る。保裔、爲に圍まれ、力戰して之に死す。

李繼遷、先朝賜ふ所の姓名を奪はれ、邊に寇して已まず、靈州を攻め陷る。西涼六合の酋長潘羅支、乞うて王師に會して、之を討つ。繼遷、西涼府を攻め陷る。潘羅支、要して、之を擊つ。繼遷、流矢に中り、靈州の境に於て死す。其子德明、降を請ふ。復た姓趙を賜ひ、後、封じて、西平王となす。

楊嗣、楊延朗、智勇にして、善く戰ふ。團練使を加へらる。虜、之を憚り、目して、楊六郎といふ。

景德元年。契丹主、其母蕭氏と大擧して入寇す。中外震駭す。參政陳堯叟は蜀人、蜀に幸せむことを請ふ。王欽若は江南の人、江南に幸せむことを請ふ。上、以て宰相寇準に問ふ。準、問ふ、誰か此策を畫する。上曰く、卿、暫らく、其可否を斷せよ。問ふ勿れ。

評　高瓊の一言痛烈骨を刺す

準曰く、臣、策を獻ずるの臣を得て、斬つて以て鼓に釁り、然る後に北伐せむと欲するのみと。遂に親征の議を定む。上、蹕を韋城に駐む。尋いで、衞南に至る。契丹、兵を擁して、澶州に至り、三面を圍合す。李繼隆等、出でて、之を禦ぐ。契丹の撻覽、弩に中つて死し、大に挫けて退却し、敢て動かず。寇準、力めて上に勸めて、河を渡らしむ。殿前帥高瓊、亦た力めて贊す。猶豫の間、瓊、衞士を麾いて、輦を進めて曰く、陛下、若し河を過ぎざれば、百姓、考妣を喪ふが如しと。梁適、之を呵す。瓊、怒つて曰く、君が輩、此時、尙ほ人の失禮を責む、何ぞ一詩を賦して虜を退けざるやと。遂に上を擁して、以て渡り、既に澶州に至り、北城に登つて、黃旗幟を張る。諸軍、皆、萬歲と呼ぶ。聲、數十里に聞こゆ。契丹、氣、奪はる。之より先、王繼忠といふ者虜に陷り、嘗て、和好の利を言ふ。故に大擧すと雖も、亦た使を遣し、繼忠の書を以て來らしむ。上、曹利用に命じて、之を報ず。是に至つて、利用、契丹の使者韓杞と共に來り、世宗取る所の關南の故地を請ふ。上曰く、地、必ず得べからず。寧ろ、金帛を與へて、以て和せむと。準の意、亦た與ふるを欲せず、且つ畫策して、以て進めて曰く、此の如くなれば、百年の無事を保つべし。然らざれば、數十歲の後、戎、復た心を生ぜむと。準、蓋し之を擊つて、隻輪をして返らざらしめむと欲す。上曰く、數十歲の後、當に能く之を禦ぐ者あるべし。吾、生靈重ね

評　宋帝和好の利に誘惑せられ國力の充實が必須的の條件たる前提を悟らず遂に亡に至る姑息大事を逸するものといふべし

て困むに忍びず、しばらく、其和を聽せと。遂に再び利用をして往かしむ。利用、歳賂金帛の數を請ふ。上曰く、必ず已むを得ざれば、百萬と雖も、亦た可なりと。準、召して、之に語つて曰く、敕旨ありと雖も、三十萬に過ぐるを得ず、若し此數を過ぐれば、來つて準を見る勿れ、準、汝を斬らむと。利用、卒に絹二十萬、銀十萬を以て、和議を定め、南朝を兄となし、北朝を弟となし、交も誓約し、各、兵を解いて歸る。

準、初め、京師を發するや、朝士に命じて、出でて諸州に知たらしめ、皆、殿廊に於て、敕を受けしむ。之を戒めて曰く、百姓は皆兵、府庫は皆財なり。汝に浪りに戰ふを責めず、但だ一城一壁を失へば、當に軍法を以て事に從ふべしと。欽若が親征の議を沮むを恐れ、其智あり、且つ福あるを以て、欽若を出して、天雄軍に知たらしむ。契丹、城下に至る。欽若、門を閉ぢ、手を束ねて策なく、齋を修し、經を誦するのみ。上、澶淵より還り、準を待つこと、極めて厚し。欽若、歸つて深く準を恨む。嘗て朝より退くや、上、準を目送す。欽若、進んで曰く、陛下、準を敬す、其社稷に功あるが爲か。城下の盟は、春秋の小國も、恥づる所なりと。上、愁然たり。欽若、毎に曰く、澶淵の役、準、陛下を以て孤注となすと。上、準を待つこと。寢や薄し。尋いで、相を罷む。王旦を以て、同平章事とす。旦は、王祜の子なり。太祖、嘗て、祜を遣して、事を按ぜし

寇準罷め王旦相となる

む。謂ふ、祜、還らば、王溥の官職を與へむと。祜、太祖の意に徇はず、竟に大に用ゐられず。祜曰く、祜、做らずとも、兒子二郎、必ず做らむと。三槐を庭に植ゑて曰く、吾が後世、必ず三公となる者あらむと。是に至つて、旦、果して、相となる。深沈にして德望あり、能く大事を斷ず。上、心深く之に屬す。趙德明、嘗て民の饑ゑたるを以て、表を上つて粮を乞ふ。群臣、皆、之を責めむことを請ふ。旦曰く、臣、德明に詔して云はしめんと欲す。塞上の儲粮は與ふべからず、已に京師に於て百萬を積む、自ら衆をして來り取らしむべしと。德明、再拜して詔を受けて曰く、朝廷人ありと。上、既に欽若の言を入れて、屢ば欽若に問ふ、何を以て恥を刷はむと。欽若、上の兵を用ゆるを厭ふを知り、謬つて曰く、幽薊を取れば可なりと。上、其次を思はしむ。乃ち請ふ、封禪し、以て四海を鎮伏し、夷狄に誇示せむと。又言ふ、封禪は當に天瑞を得べし、前代、人力を以て之を爲すあり、河圖、洛書、果して此あらむや。聖人、神道を以て教を設くるのみと。是に於て、太中祥符より以來、屢ば天書あつて降る。東、泰山に封じ、西、后土を汾陰に祀る。又、趙氏の祖九天司命天尊あつて降る。天下に天慶觀を立て、聖祖殿を置き、聖祖の名玄朗を諱み、玉清昭應宮を作る。旦、其事を止むる能はず。

上、在位二十六年。元年、呂端罷めてより後、張齊賢、李沆、呂

李沆と王旦

評　李沆人主をして水旱盗賊社會の下情を知らしむべしとなす名言といふべし

蒙正、向敏中、畢士安、寇準、王旦、相繼いで、相となる。惟だ旦は位に居ること十一年。李沆の相たりし時に當つて、旦、始めて參政たり。沆、論語を讀むを喜ぶ。嘗て曰く、宰相となつて、論語中の「用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てす」といふ兩句の如き、なほ行ふ能はず。聖人の言、終身之を誦するも可なりと。沆、日に四方の水旱盗賊を取つて、之を奏す、旦謂ふ、細事、上聽を煩すに足らずと。沆曰く、人主少年、當に人間の疾苦を知らしむべし。然らざれば血氣方に剛なるや、意を聲色犬馬に留めざれば、土木甲兵禱祀の事作らむ。吾老いたり、見るに及ばず、是れ參政他日の憂なりと。太中祥符に至つて、封禪祠祀土木、並び興る。旦乃ち歎じて曰く、李文靖は眞に聖人なりと。大禮ある毎に、旦、輒ち首相を以て天書を奉じて行く、常に悒悒として樂まず、去らむと欲すれば、上、之を遇する厚し、位に薨ずるに及びて、遺令すらく、髮を削り、緇を披き、以て斂せよと。議者謂ふ、旦、君を得たりしも、正を以て自ら終る能はずと。或は之を馮道に比すといふ。張詠、嘗て言ふ、吾が榜中、人を得る、最も多し。謹重にして德望あるは、李文靖に如くはなく、深沈才德、天下を鎮服するは、王公に如くはなく、面折廷爭して素より風采あるは、寇公に如くはなく。方面の寄に當つては、詠敢て辭せずと。旦の世に當つて、王欽若、既に相たり。欽若、罷む、寇準、再び入つて相たり。參政丁謂、準

評　官長の爲めに鬚を拂ふ者豈丁謂一人ならんや

に事へて、甚だ謹む、嘗て、會食するや、羹、準の鬚を汚す。謂、起つて之を拂ふ。準、笑つて曰く、參政は國の大臣なり、乃ち官長の爲に鬚を拂ふかと。謂、甚だ愧恨す。準、罷む。李迪、丁謂、相となる。準、遠く貶せらる。迪、罷む。謂、獨り相たり。時に、上既に病あり、昏眩す。準が罷貶せらるるが如き、皆、謂、中宮に白して之を行ひ、上、知らず。尋いで崩ず。年五十五、在位改元するもの五、曰く咸平、景德、曰く太中祥符、曰く天禧、顯興。太子立つ、之を仁宗皇帝となす。

【仁宗皇帝】名は禎、母は李氏。章獻明肅劉皇后、之を子とす。眞宗、皇子を得ること、既に晩し。初め生まるるや、晝夜啼いて止まず、道人あり、言ふ、能く兒啼を止めむと。召し入る。乃ち曰く、叫ぶ莫かれ、叫ぶ莫かれ、何ぞ當初の笑ふ莫きに似かむと。啼くこと、卽ち止む。蓋し謂ふ、眞宗、嘗て上帝に顙つて嗣を祈る。群仙に問ふ、誰か當に往くべき者ぞと。皆、應せず。獨り、赤脚大仙、一笑す。遂に、命じて、降つて、眞宗の子とならしむ。宮中に在つて、赤脚を好む、其驗なり。昇王より、太子となり、年十三にして、位に卽く。劉太后、簾を垂れて、同じく政を聽く。丁謂、事を用ゐ、寇準を讒して、雷州司戶となす。參政王曾、密に奏す。謂、禍心を包藏し、眞宗の山陵、擅に皇堂を絕地に移すと。遂に謂を罷め、貶して、崖州司戶に至る。謂、初め、學士に命じて、準

の責詞を草し、春秋無將漢法不道を用ゐしめて證事となす。謂が讒せらるるに及び、學士乃ち其語を用ゆ、人、是を快とす。準を逐ふ時に方つて、京師語つて曰く、天下の寧を得むと欲せば、當に眼中の丁を拔くべく、天下の好を得むと欲せば、寇老を召すに如くはなしと。然れども、準、竟に北に還るに及ばずして卒す。王曾、相となり、王欽若、再び相たり。欽若、卒す。張知白、相たり。知白、卒す。張士遜、相たり。士遜、罷む。呂夷簡、相たり。惟だ王曾、天聖の初より、相位に居り、是に至るまで七年にして罷む。曾、初め進士に擧げられ、青州の發解、禮部の廷試、皆、第一なり。人曰く、狀元三場、喫著し盡きずと。曾曰く、曾、平生の志、濕飽に

評　丁謂寇準を貶するの責詞を以て自らの責詞とせらる所謂己れに出でたるものは己に返るものとへいふべきか

評　王曾人を採用するの法心得べきの事たりい然れども之を用ゐて偏すれば亦弊あらざる事を知らるべからず

在らずと。眞宗の末、色を正しうして朝に立つ。朝廷、賴つて以て重きを爲す。相と作るの日、進退する所の士、知る者あるなし。或ひと、其故を問ふ。曾曰く、恩、己に歸せむと欲せば、怨は誰をして當らしめむと。

交趾の黎桓、景德中に卒す。子龍廷、其兄龍鉞を殺して自立し、來貢す。名を全忠と賜ふ。太中祥符の閒、全忠卒す、子幼なり。弟立つを爭ふ。大校李公蘊、遂に之を殺して自立す。是に至つて公蘊、卒す。子德政、立つ。來つて、喪を告ぐ、封じて交趾郡王となす。

契丹主隆緒殂す。聖宗と號す。子宗眞立つ。

西夏の趙德明、卒す。子元昊、立つ。

劉太后、上を以て己の子となす。而して、上の母李氏、默默として、先朝嬪御の中に處り、未だ嘗て自ら異とせず。人、亦た后を畏れて、敢て言はず。病革まる、乃ち位を宸妃に進めて薨ず。宰相呂夷簡、太后に奏す、宜しく、禮を備へて、以て葬るべし。曰く、他日、夷簡、嘗て說き來らずと道ふ勿れと。宸妃卒して、一年を踰えて、太后崩ず。制を稱する十一年。上、始めて政を親らす。之より先、呂夷簡、張士遜、並に相たり。夷簡、罷む。李迪、相たり。而して、士遜、首相たり、發明する所なくして罷む。夷簡、復た相たり、迪、罷む。王曾、復た相たり。然も、權、夷簡に在り。夷簡の

四賢一不肖之詩

初めて罷むるや　郭皇后の言を以てす。復た入るに及びて　后、尙美人と寵を爭ふの隙あり　遂に郭后を廢す。夷簡、力あり。臺諫孔道輔、范中淹、爭ふ。得ずして出づ。仲淹、朝に還つて、待制となり、開封府に知たり。事を言ふこと、愈よ急、數ば時政を議す。夷簡其職を越ゆるを訴ふ。罷めて饒州に知たり。館閣余靖、尹洙、之を爭ふ。皆、坐して貶せらる。歐陽修　諫官　高若訥の諫めざるを責む、謂ふ、人閒羞恥の事あるを知らずと。若訥、其書を奏す、亦た貶せらる。蔡襄、四賢一不肖の詩を作る。四賢は、仲淹、洙、靖、修を指し、不肖は、若訥を指すなり。王曾、對に因つて、夷簡が賂を納れて恩を示すを斥く。夷簡、曾、並に罷めらる。王隨、陳

富弼

堯佐、之に代る。建明する所なきを以て、罷めらる。張士遜、章得象、之に代る。

趙元昊、夏、銀、綏、宥、靈、鹽、會、勝、甘、凉、瓜、沙、肅州の地を據有し、興州に居り、賀蘭山を阻して、固となし、大夏皇帝と僭號す。西邊、騷然たり。范雍、西夏を經營す。元昊が將に延州を攻めむとするを聞き、懼るること甚しく、門を閉ぢて救はず。劉平、戰ふ。中官黄德和、平、賊に降ると誣奏す。兵を以て其家を圍み、其族を收めむを議す。富弼言ふ、平、環慶より來り援く、姦臣救はず、故に敗れ、賊を罵つて死す、德和、人を誣ひて免れむことを冀ふと。坐して腰斬せらる。范雍、罷む。時に軍興つて多事、張士遜、補ふ所なし。諫官韓琦、上疏して曰く、政事府は、豈に養病坊ならむやと。是に於て、士遜致仕す。呂夷簡、復た相たり。韓琦、范仲淹を用ゐて、邊帥となす。仲淹、嘗て、兼ねて延州に知たり。夏人、相戒めて曰く、延州を以て意となす勿れ、小范老子、胸中自ら數萬の甲兵あり、大范老子の欺くべきに比せざるなりと。邊人之が爲に語して曰く、軍中一韓あり、西賊之を聞いて心膽寒し。軍中一范あり、西賊之を聞いて膽を驚破すと。昊の大に逞しうするを得ざるは、蓋し、琦、仲淹の力を宣ぶること、居多なる

政事府豈養老場ならんや

に藉る。

契丹、朝廷、西夏の撓あるに乘じて泛使を遣して、石晉割く所、

周の世宗取る所の關南の地を求めしむ。知制誥富弼、接伴す。時に夷簡、事に任ず。人、敢て抗するなし。弼、數ば之を侵す。夷簡、事に因つて、弼を罪せむと欲し、弼を以て、報使とす、弼、至る。往返論難、力めて、其地を割くを拒む。使、還る。再び遣る。而して國書、ことさらに異同をなし、夷簡、以て弼を陷れむと欲す。弼疑うて啓き觀る。乃ち復た回奏し、夷簡を面責し、書を易へて往き、歳賂銀絹各十萬を增し、和議を定めて還る。

呂夷簡、罷めむことを求む。上遂に天下の弊事を更めむと欲し、諫官の員を增し、王素、歐陽修、余靖、蔡襄に命じて、諫院の職に供せしめ、韓琦、范仲淹を以て、樞密副使となし、夏竦を召して、

歐陽修朋黨論を上る

樞密使となす。諫官、論じて竦を罷め、杜衍を以て、之に代ふ。國子直講石介、喜んで曰く、是れ盛德の事なりと。乃ち慶曆盛德の詩を作る。曰へるあり、衆賢の進むは、茀の斯に拔くが如く、大姦の去るは、距の斯に脫するが如しと。大姦は、竦を指すなり。仲淹、琦、適ま陝西より來る。道中、詩を得たり。仲淹、股を拊つて琦に謂つて曰く、此怪鬼輩の爲に事を壞ると。竦、因つて、其黨と論を造し、衍等を目して黨人となす。歐陽修、乃ち朋黨論を作つて、之を上る。略に曰く、小人は朋なし、惟だ君子は之あり。小人利を同じうする時、しばらく朋を爲すものは僞なり。其利を見るに及びては、先を爭ひ、或は利盡きて情疎、反つて、相賊害す。君子、身を

修むれば、道を同じうして相益し、國に事ふれば、心を同じうして共に濟ふ、終如一の如し。是れ君子の朋なり。君たる者は、但だ當に小人の僞朋を退けて、君子の眞朋を進むべし、乃ち天下治まらむと。

仲淹、參政に遷り、富弼、樞副となる、上既に仲淹等を擢んで、進見する毎に、太平を以て之を責め、天章閣を開いて召對し、坐を賜ひ、筆札を給す。仲淹等、皆惶恐す。退いて、十事を列奏す。一に曰く、黜陟を明かにせよ。二に曰く、僥倖を抑へよ。三に曰く、貢擧を精しくせよ。四に曰く、官長を擇べ。五に曰く、公用を均しくせよ。六に曰く、農桑を厚うせよ。七に曰く、武備を修めよ。八に曰く、徭役を減ぜよ。九に曰く、恩信を覃せよ。十に曰く命令を重くせよと。上方に信向して、悉く其說を用ゆ。惟だ武備、府兵を復せむと欲するの一說は、宰相以て不可となす。時に、章得象、晏殊、並に同平章事たり。未だ幾ならず、仲淹、陝西、河東を宣撫し、富弼、河北を宣撫す。諫等、謗を造す。故に、仲淹等、朝に安んぜず、歐陽修、亦た出でて河北に使す。晏殊、罷む。杜衍、同平章事たり。衍、務めて僥倖を裁す。內降ある毎に、率ね寢格して行はず、詔書を積むこと十數、輒ち上の前に納る。上、嘗て、諫官に語つて曰く、外人、衍が內降を封還するを知るか。朕、宮中に在つて毎に告ぐべからざるを以て止むもの、封還する所よりも多き

一網打去し盡す

なりと。會ま、衍の婿蘇舜欽、進奏院に監とし、故紙を鬻ぐの公錢を用ゐ、神を祀り、客を會す。御史中丞王拱辰、素より衍等の爲す所を便とせず、因つて其事を攻む。獄に置いて罪を得る者數人。拱辰、喜んで曰く、吾、一網打去し盡せりと。衍、相たること七十日にして罷む。賈昌朝、平章事兼樞密使たり。韓琦、樞副を罷めて揚州の事に知たり。章得象、罷む。陳執中、平章事たり。昌朝、罷む。夏竦、代つて、樞密使となる。

貝州の卒王則反す。文彥博、河北を宣撫す。討つて之を平らぐ。

趙元昊、慶曆の初、嘗て、范仲淹に因つて和を請ひ、反覆數歲、竟に款を納れて、復た臣と稱す。策命して、夏國王となし、曩霄と名づけ、歲に銀絹茶綵二十五萬五千を賜ふ、遂に復た邊に寇せず。卒す。子諒祚、立つ。

陳執中、建明する所なきを以て罷む。

夏竦、罷む。宋庠、之に代る。尋いで、同平章事たり。未だ幾ならずして罷む。

張貴妃　兄堯佐、一日、四使に除せらる。監察御史裏行唐介、之を論ず。聽かず。遂に劾奏す、文彥博、さきに蜀に守たり。燈籠錦を以て貴妃に獻じて、執政を得たり、故に堯佐に黨すと。上、怒つて介を遠貶す。彥博、亦た罷むるを求む。龐籍、平章事たり。

廣源州の儂智高、廣州に寇し、連歲、諸州を陷る。邕より廣西に

至るまで、皆、其害を被る。樞副狄青に命じて、討つて、之を平らぐ。還つて、樞密使となる。

龐籍、罷む。

陳執中、梁適、平章事たり。適、罷む。劉沆、之に代る。執中、罷む。文彥博、富弼、並に同平章事たり。士大夫、人を得るを相慶す。上曰く、人情、斯くの如し。豈に夢卜に賢らずやと。上、嘗て王素に問ふ、孰れか相と爲すべきと。素曰く、惟だ宦官宮妾、姓名を知らざる者、其選に充つべし。上、慨然として曰く、斯くの如くなれば、富弼のみと。

契丹主宗眞、殂す。興宗と號す。子洪基、立つ。

王安石

司馬光進三劄

交趾の李德政、卒す。子日遵、立つ。

劉沆、罷む。文彥博、罷む。韓琦、平章事たり。富弼、罷む。

王安石、知制誥たり。安石、官を遷る毎に、遜避して已まず。知制誥に至つて、復た官を辭せず。安石、嘗て花を賞し魚を釣るの宴に侍し、誤つて釣餌を食ふ。既に悟るも、之を食ひ既す。上、其不情にして非を遂ぐるを以て、之を惡む。安石、重名あり。士、爭つて之に向ふ。惟だ、蘇洵、見ず、辨姦論を著し、亦た以爲へらく、人情に近からず、必ず大姦慝ならむと。

司馬光、諫院に知たり。三箚を進む。一に君德を論ず、三あり、曰く仁、曰く明、曰く武。二に臣を御するを論ず、曰く官に任ず、

曰く賞を信にす、曰く罰を必す。三に軍を揀ぶを論ず。又、五規を進む、曰く業を保す、曰く時を惜む、曰く謀を遠くす、曰く微を謹む、曰く、實を務むと。

策して、科人を制す。蘇軾、蘇轍を得たり。

曾公亮、平章事たり。

上在位四十二年、改元するもの九、天聖、明道は垂簾の政なり。景祐以來は、政、己より出づ。寶元、康定の間は西鄙多事。慶曆、更めて化し、君子朝に滿つ。皇祐、至和、嘉祐に至つて、天下承平無事。恭儉の德、人を愛し、物を恤むの心、卽位より升遐に至るまで、終始一日の如し。遺制下る時、深山窮谷と雖も、奔走せざるなく、悲號して止む能はず。壽五十四。皇子立つ、之を英宗皇帝とす。

【英宗皇帝】初名は宗實、濮の安懿王允讓の子、太宗の曾孫なり。仁宗、立てて皇子となし、名を曙と賜ふ。仁宗崩ず、固く避くること數回にして後に、位に卽く。憂疑を以て、疾を致す。慈聖光獻曹太后、權に政を聽く。上の擧措、或は常度を改め、宦者を遇する、尤も恩少し。左右、多く悅ばず、乃ち共に讒閒をなす。兩宮遂に隙を成す。宰相韓琦、參政歐陽修等の調護するに賴つて、上、既に康復して政を親らす。太后、簾を撤す。琦、一日、空頭の敕を出す。修、既に僉す、趙槩、未だ僉せず。修曰く、惟だ之に書せよ。韓公

必ず說あらむと。琦、政事堂に坐し、內侍任守忠を召して、庭下に立たしめて曰く、汝の罪、死に當すと。責めて、蘄州に安置す。蓋し、兩宮を交鬪するの人なり。

濮王を崇奉する典禮を議す。執政、皇考と稱せむと欲す。又、太后の詔を以て、上をして親と稱せしむ。司馬光、范鎭、呂誨、范純仁、呂大防、呂公著、交も論じて、以て不可となす。鎭は翰林を罷め、誨、純仁、大防は言職を解き、公著は侍講を罷む。議、竟に決せず。

契丹、大遼と改號す。

上、崩ず。在位四年。改元するもの一、曰く治平。年三十八。皇太子立つ、之を神宗皇帝となす。

【神宗皇帝】名は頊、母は宣仁聖烈皇后高氏、曹太后の甥なり。幼にして、英宗と同じく后の所に鞠はる。後に英宗の配となつて、頊を生む。潁王より太子となり、尋いで、位に卽く。

濮議あつてより以來、言者、歐陽修を攻めて已まず、遂に罷む。韓琦亦た罷む。

王安石、翰林學士となり入對す。首に術を擇ぶを以て言となし、言、必ず堯舜を稱す。

富弼、同平章事たり。王安石、參政たり。安石、既に政を執る。士太夫、素より、其名を重んず。以爲へらく、太平立どころに致す

新參

大姦似忠大詐似信

べしと。呂誨、時に御史中丞たり、將に對せむとす。學士侍讀司馬光、亦た將に經筵に詣らむとし、相遇うて並び行く。光、密に問ふ、今日言ふ所は何事ぞ。曰く、袖中の彈文は乃ち新參なり。光、愕然として曰く、衆、人を得るを喜ぶ、奈何ぞ之を論ずるや。誨曰く、君實亦た此言をなすか、安石、偏見を執り、人の己に佞するを喜ぶ、天下必ず其弊を受けむと。光、退いて、之を思へども、其說を得ず。縉紳の間、其疏を傳ふる者あり、往往其太だ過ぎたるを疑ふ。誨、言ふ、大姦は忠に似たり、大詐は信に似たり、安石、外、朴野を示し、中、巧詐を藏し、驕蹇、上を慢り、陰賊、物を害す、と。其十事を疏す。上、再び手詔を降して、誨を諭す。誨、之を論じて已まず。遂に誨を罷む。安石、建議して、始めて、三司の條例司を置き、議して新法を行ふ。言ふ。周、泉府の官を置いて、天下の財を變通す。後世、惟、桑弘羊、劉晏、粗ぼ此意に合す。今、當に泉府の法を修め、以て利權を收むべしと。安石、多く呂惠卿と謀る。人、安石を號して孔子となし、惠卿を顏子となす。之より先、治平中、邵雍、客と天津橋上に散步し、杜鵑の聲を聞いて、愁然樂まず。客、其故を問ふ。雍曰く、洛陽、もと杜鵑なし。今、始めて至る。天下、將に治まらむとすれば、地氣、北よりして南し、將に亂れむとすれば、南よりして北す。今、南方地氣至る。禽鳥飛類は氣の先を得たるものなり。二年ならずして、上、南士を用ゐて相と

王安石議して新法を行ふ

呂惠卿

評　地氣の說は當否を知らざるも南人權を得れば國政紛亂するは四千年來支那史實の示す所なり。今の蔣介石も亦南人なり。

なし、多く南人を引いて、專ら更變を務め、天下、之より多事ならむと。是に至つて、雍の言、果して驗ありといふ。安石、青苗法を行はむと欲す。以爲へらく、周官の國服爲息の法なりと。蘇轍曰く

青苗法

評　官資運用の弊古今軌を一にするものあり

金を以て民に貸せば、吏、緣つて姦をなし、錢、民の手に入れば、良民と雖も、妄に用ゆるを免れず。其錢を納るるに及びては、富民と雖も、違限を免れず。鞭箠必ず用ゆれば、州縣、煩に勝へざらむと。參政唐介、新法を爭論す。勝たず。疽、背に發して卒す。時人生老病死苦の喩あり。安石を謂うて生となし、曾公亮を老となし、介は死し、富弼は議論合はず、病と稱す、參政趙抃、安石を如何ともするなく、惟だ苦苦と稱するのみ。安石、抃を折いて曰く、君が

生老病死苦

輩、書を讀まざるに坐するのみ。抃曰く、皐夔稷契、何の書をか讀むべきと。安石、亦た對ふる能はず。

使を遣して、農田水利を察せしむ。

義倉を罷む。

均輸の法を行ふ。

臺諫劉琦、錢顗、新法を議するを以て貶せらる。

諫院范純仁、檢詳文字蘇轍、新法を議するを以て罷めらる。

青苗の法を行ふ、常平官を置く。

富弼、罷む。陳升之、同平章事たり。升之、初め、安石に附く。

既に相として、頗る異同をなす。

均輸の法